

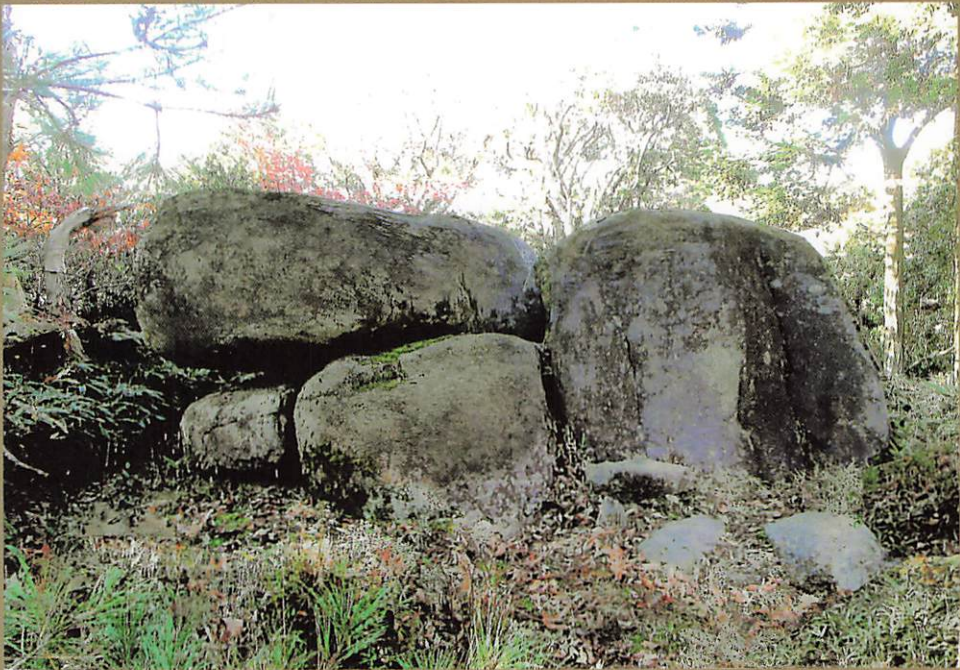
古代遺跡

日本文化の源泉としての

いわくら いわさか
磐座・磐境

Megalith Shrines in Ancient Society

いわくら〈磐座〉第三号



2020

NPO法人 古代遺跡研究所

古代遺跡

日本文化の源泉としての

いわくら いわさか
磐座・磐境

Megalith Shrines in Ancient Society

いわくら〈磐座〉第三号



2020

NPO法人 古代遺跡研究所

古代遺跡

日本文化の源泉としての

いわくら いわさか
磐座・磐境

Megalith Shrines in Ancient Society

いわくら 〈磐座〉 第三号



2020

NPO法人 古代遺跡研究所

古代遺跡

日本文化の源泉としての

いわくら いわさか
磐座・磐境

Megalith Shrines in Ancient Society

いわくら〈磐座〉第三号

2020

表紙の写真：神戸市六甲山頂の西磐座（天照大神の磐座ともいわれている）
裏表紙の写真：宮崎県と熊本県の県境・国見岳山頂の西磐座

目次

略歴	79
編集後記	74
参考資料	68
西宮・越木岩神社 祭祀遺跡の巨石群	65
(八)	57
(七)	49
(六)	41
(五)	33
(四)	24
(三)	18
(二)	11
(一)	5
日本文化の源泉としての磐座・磐境	1
巻頭言	1

巻頭言

「祈り」は人間独特の行為です。

「祈り」への依存は、生産力が低いほど高く、また天変地異などの危機が接近するにつれて高くなります。

縄文人が住んでいた社会は、国家発生前の氏族制度で、国境はなく、そこで自然崇拜・太陽信仰・アニミズムが一般的な世界でした。

彼らは太陽崇拜の祭場を、もつとも天に近いところに、聖なる岩をもつて築いたのです。山の多い日本では山の上に、山の無い砂漠では山のように高く大きな祭場を建てたのです。

エジプトや、中南米のピラミッド、英国のストーン・ヘンジ、フランスのカルナク列石、ケルト人の巨石文化の遺跡など世界各地に残っています。

日本では、この祭場を磐座(いわくら)、岩境(いわさか)と呼んでいます。

そこで人々が祈ったことは、豊かな「もの」に囲まれた生活ではありません。

マイ・ホーム

マイ・マニー

マイ・カー

といった私有財産の安泰と繁栄ではなく、この地上に生きとし生けるもの全てのものに、自然の恵み豊かならんことを祈ったのです。

その祈りの対象は、シンボリックには太陽ですが、月も風も雨も星も大宇宙に満ち満ちているエネルギーを崇拜したのです。

ここに、大宇宙に向かって生きる縄文人の世界観が伺えます。しかも彼らは、人間以外の存在を差別せず、かえってその精神を尊んだのです。このなかからあの素晴らしい想像力に富んだ縄文土器が生まれたのでした。

さて、その後 この磐座はどうなったでしょうか。

ずっと後世になって、日本では神社を木材で建てるようになると、人々は住まいの近くに里宮を建て、山上の磐座を忘れてしまったのです。

奈良の大神(みわ)神社のように磐座のある山と神社が隣接している場合を除いて、現在その数全国に十万といわれる神社の大方は、両者が離れており、元宮である磐座は忘れ去られたのです。

一方、磐座は文化財に指定されることが少ないため、ゴルフ場や会社の寮の建設など、山上の開発が進むにつれて破壊されることが多いのが現状です。

しかし、全国の展望の良い中心な山の上には殆ど磐座の跡が見られます。

それは 岩門や各種の列石、動物や方向石、日本独特の三種の神器を象った岩、なかには当時の星座を残した天文石などに囲まれています。

その意味は、これを築いた縄文人の世界観によってのみ正しく知ることが可能です。そのため古事記を、書かれている漢字を排して、もとの日本語の意味によって解釈し直すことも必要です。

この研究所は、

- ① 山野に放置されまたは無理解な土地所有者によって破壊の危機にある磐座を救出し、
- ② 所属の研究者を中心に市民ボランティアの参加を得て、これらを測量・調査して世に出し、修復・復元すること、
- ③ 更に貴重な歴史的な文化財として公の機関が保護するよう進言すること

を目的としています。

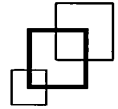
磐座を守り、磐座を建てた縄文人の世界観を知ることが、国境なき未来社会を構想するためにも不可欠です。

古代の人々が築き上げた過去に学んで未来を拓こうではありませんか。

日本文化の源泉としての磐座・磐境

NPO法人 古代遺跡研究所 創設者

中島 和子



(一)

1 日本文化の特徴

戦後、国際化の進展につれて、私たちの周辺でも「異文化理解」とか「比較文化」という言葉が研究テーマとしてよく使われるようになった。どちらも比較研究だから「比較の尺度」なり「比較の軸または枠」が必要となる。自文化を軸として他文化を観察分析するまたは二つ以上の文化の比較には尺度が必要となる。何を尺度にするかによって結果は異なってくる。

この分野の先達である欧米の研究者は、まず西欧文化を軸として世界を見渡し、そこにもう一つの軸「アジア」が必要なこと気づく。ところが研究対象が日本となると、この二本の軸はあまり有効でなくなる。歴史における封建時代の存在や近代化の過程は西欧のそれに近いが、明らかに日本はアジアである。しかしアジア文化圏に入れてしまうには、他のアジア諸国と違い過ぎる。西欧の中のアジアか、それともアジアの中の西欧か、と議論は尽きない。

ところが、これらの比較軸をひっくり返す研究を発表したのが、もとオーストラリアの新聞記者、今は東京の多摩大学長を務めるグレゴリー・クラーク。彼は、このどこにも当てはまらない日本の文化こそ、実は世界の文化が昔そうであった原型を残すもので、他の文化はその後の歴史の中で変化を遂げたのだという。長い中国での取材で、彼は、中国が昔の農村と変わらず環境は牧歌的であるにも関わらず、人々の考えは非常に原則的 (Rationalistic) で、その点、西欧社会と同じ範疇に入る。原則的とは、原理や議論、討論などを重視し、それに基づいて行動することを意味する。ところが日本に来てみると、見上げる高層ビル、網の目のようなハイウェイとハイテクの進んだ先進工業国であるにも関わらず、人々の考えは、昔の人々がそうであったように極めて情緒的 (Instinctive) であるのに驚く。情緒的とは周りの人達と仲良くしたいとする本能的欲求、目前の状況や人間関係に直感的に対応する能力や感受性なので、情念的 (emotional) なものと実際の (Practical) なものを合わせた対応能力だと言う。^①

原則的と情緒的との二つの国民性の相違は、例えば、次のように説明できるのではないだろうか。ある人が借金を踏み倒した場合、踏み倒した者は絶対に悪く謝罪させられ謝罪文を書き法の裁きを受けるのは当然である。原則的社會では、幾ら頭を下げて謝ろうとも罪が軽減されるものではない。ところが日本では、踏み倒した者が悪いのは変わらないのだが、往々にして「こんなに謝っているのに許さないとは何事だ、お前はそれでも人間か」と被害者が周囲の人々に噛みつかれることが珍しくない。時代や都市と農村また個々の場合で事情は異なるが、確かに日本では幾ら原則的に正しくても人情や人間性に欠けた判断をすると世間は許さない。

何故このような違いが生まれるのか、クラークは、日本が他国による苛酷な支配を受けなかった歴史を原因として挙げている。確かに外からの暴力によって自己が否定されると、人間は賢くなる。自分を守りまた守ることが如何に大切で正しいかを文書にし演説もする。そのためには自分たちのアイデンティティの基盤を何らかの普遍的絶対的イデオロギーに結びつける。抑圧者に対する敵意・警戒心、そして策略を練り目的を果たそうとする。本来の部族社会から逸脱して「イデオロギー化された」社会とならざるを得なかった。相手との関係は口約束ではなく契約または条約と言う法的根拠に

よって確立し、それを抜け目なく自己目的に合致するよう改善してゆかねばならない。人々の考えは原則的合理的にならざるを得ない。その点、日本は、まったく無傷とは言えないまでも苛酷な外国支配を受けることがなかった。クラークは言う。

「日本は、その本質において人間社会の正常な姿を示すものである。本来の部族社会のエモーションナルで集団指向的な価値体系から真つ直ぐ発展してきたのが日本である」と。^②

それでは、世界中の人たちが昔そうであったという部族的情緒社会とは、いかなる社会なのか。何がそのような社会を造りだしていたのか。この問題を取り上げる前に日本文化の特殊性について今少し目を広げる必要がある。

2 日本人の宗教行動の特異性

多くの外国人が日本に来て理解に苦しむのは、日本人の宗教にたいする態度である。統計によると仏教徒が一番多く、次に神道の信者、次にキリスト教徒の順であるが、これらを数字ではつきり割り切れることは、非常にむずかしい。

例えば、仏教徒の大多数は一年のうちに何度か神社の鳥居を潜って宮参りをしているし、神道信者の多数は、いずれかの寺に祖先伝来の墓地を守ってもらっている。またクリスマ

スがくると子供を持つ大多数の両親は、目の前の仏壇や神棚に関係なくサンタ・クローズを演じる。サンタ・クローズは、社寺の経営する幼稚園にもやって来るらしい。驚くのは最近その人氣が急上昇しているキリスト教式結婚式である。教会へ行ったこともなく聖書を手にしたことのない若者たちが、全く面識のないキリスト教の神に向かって突如として結婚の誓いをたて加護を祈願する。つまり日本人の大多数は、仏教でありながら神社に参り、時にはキリスト教にもなる…。厳しい一神教徒の目からみると、これほど神を裏切り冒瀆する行為はない。そのために破門され親兄弟からも絶縁され、社会から村八分にされても尚余りある罪深き行為である。しかし日本では一般庶民の間で平然と行なわれているだけでなくこれを指導するべき宗教上の指導者が、経営のためとは言え、極めて寛容で、なかには積極的役割を果たしている場合さえある。

そこで日本人は余ほど宗教が好きなのだろうと考えたある外人が、「あなたの宗教は何ですか」と聞き直つて聞いたところ、大方の学生は、何と「宗教は無い」と答える。彼らの家には仏壇か神棚があり、時には両方あり、家族に死者が出ると、そこに祀り手を合わせ法事にも出かける。これらは立派な宗教行為である。しかし日本人は「無宗教」だと言ひ、

しかも「無神論」ではないのだと言う。まったく日本人の宗教観ほど外人を混乱に落とし入れるものはないだろう。クラークさんの言う日本人の国民性「情緒的、instinctive」がこれに関わっていることは否めないが、その実態は何だろうか。

3 文化の歴史的連続性

ところで、日本人の宗教は仏教でもあり神道でもある、とは言うものの、一般庶民の神社との結びつきは、お寺との結びつきと同じではない。このごろは、お寺でも結婚式を挙げるようになったと聞く。年々事情は変わりつつあるが、例えば、今でも安産の祈願にお寺でお経をあげてもらったと言う話は余り聞かない。子供の誕生祝い、七五三と子供の成長に対する感謝と祈願、結婚式は——たとえ仏教徒でも——神社で行うのが、長い習慣になつていた。つまり生命の根源に関する祈願は、仏教徒と言えども神社に行くのが適切と考えているようだ。それに「宗教は無い」という若者たちでさえ、大学受験の合格祈願や恋の成就のためには、せつせと近くの神社へ足を運び、絵馬や神札に熱い願いを込めて祈る。

またハイテクを自慢する日本ではあるが、如何なる近代的高層ビルも、地の神に対する地鎮祭なくしては建たず、如何

なる新型、大型の車も、安全運転の祈願のために神社の鳥居をくぐり車中に守り札を下げることなくしては、安心してハイウェイを走ることが出来ないのが日本人なのである。

先史の昔、自然崇拜時代のご祭神である太陽の大神や地球創造の神、雷の神、風の神を始め八百万の自然神を祀る神社は、今も都市とその周辺に緑の地帯を確保していて、市民生活の重要な部分を占めている。他の先進国ではとくに姿を消してしまったこれら先史時代の神々が、日本では現在もお生き続けており、人々の生活様式や社会習慣のなかに深く浸透して日本文化の特徴をなしている。歴史的連続性からみれば、日本は、先史的古代的中世的近代国家と言えよう。

南米の未開社会を研究したフランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースは、日本の印象を次のように語っている。「私が人類学者として大変感動したのは、最も現代的な面をもつ日本が、一方ではそれから最も遠い、つまり自分たちの根源と切り離される事がないということです。それに対して私たちは、自分の根源が存在することを知ってはいても、そこに立ち返ることは非常に難しい。私たちとその根源との間には越えることのできない溝があり、こちら側からはそれを眺めるといふ以上のこととはできない。ところが日本は根源的な過去との連続性、あるいは結びつきがあります。それは

永久的なものではないかもしれませんが、少なくとも今は存在しています」

4 文化の根源

クラークは、国民意識や国民性が国のあり方によって変わったことを指摘し、レヴィ・ストロースは、その民族の文化的根源と現代との連続の有無を問題にしている。両者は文化を見る観点を異にしているが、同じ前提に立っている。すなわち前者の「本来的社会」と後者の「根源」である。これらは昔、全世界的存在だったが、今は先進国のうちでは日本だけが、不十分ながら残していると言う。日本は、本来的社会の特徴である部族的情緒的社会であるとともに「根源」との結びつきをも保つていいるからである。

それではその根源的本来的社会とは具体的にどのような社会なのだろうか。日本人としては甚だ気になるところである。

私見を述べると、それはまず、国家発生以前の社会であること。したがって世界に国境がない時代。血縁に基づく氏族制度があり、人々は自然崇拜・太陽崇拜・アニミズムであった長い長い時代である。そこへこれを壊す二つの要素が生まれた。一つは国家の発生で、世界はやがて国家によって分割

され競争と侵略をくりかえす。他は宗教の成立と宗教による征服である。前者については周知の事実なので説明を要しないであろう。後者については意外に思われる節があるので、筆を加えると、まず宗教とは何かから始める必要がある。宗教とは第一に教祖がいること、第二に教典があり、第三に拡大発展を望む組織があることで、ここから高度の排他性が生まれる。一方、氏族制度下の自然崇拜や太陽崇拜には、教祖も教典も組織すらない。宇宙に漲ぎる生成発展のエネルギーを神として崇拜しているので、排他性は生まれえない。かえって高度の普遍性・寛容性を特徴とする。私は大学時代に、後者を原始宗教と習い、その後、国家の発生とともにキリスト教などの高等宗教が誕生したと習ったが、これは間違いであって、両者は別範疇に属する。前者は宗教、後者は生活様式、way of life なのである。

先史時代の自然(太陽)崇拜は、生活様式として日本社会の底辺に生き残ってきた。生活様式は排他性をもたないから外来の宗教に対して寛容である。外来の宗教や文化は社会の上流(知識)階級から入り社会全体へ広がって行く。しかし社会の下層には、従来の生活様式が古層として深く定着している。影響を受けて変化することはあっても抹殺されてしまうことはなく、かえって仏教などは、日本へ来て日本化

され完成されたと言われている。

しかし他国の例をみると、日本はむしろ例外的である。宗教が社会を「根源」から切り離してしまった場合が多い。何故、レヴィ・ストロースが自分たちは「根源」との断絶によって川の向こうにそれを眺めることしかできないかという、「根源」はキリスト教と言う宗教によって排除されてしまったからだ。シーザーがヨーロッパを征服した時、キリスト教を布教したが、キリスト教のもつ排他性の故に、それまで存在していた自然(太陽)崇拜は、異教として徹底排除されてしまい、その後は蟻の這い出る隙もないまでの高度なキリスト教文化圏が確立されたのであった。他の宗教についても多かれ少なかれ同様の歴史をみる事ができる。

先史時代の自然神への崇拜は、日本では仏教の伝来とともに、仏教に対して自らを宗教化せざるを得ぬ運命を辿る。即自的存在から対自的存在へ、そして神道と呼ばれ、神社が人々の生活のなかで不可欠な存在となったのである。いわば神社は先史時代からの文化的根源を守り後世に伝える場となってきたのであるが、ここに一つの疑問が残る。

神社に見られる木造建築の始まりは、発掘研究によると、せいぜい二世紀から三世紀と言われている。それ以前に神社に代わる何があったのか。また神社は全国に行き渡ってその

数は今十万とも言われている。この数とその全国的配置からみて神社に代わるものは、神社建築のはるか以前から広く存在していたと考えられる。それは何であろうか。

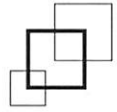
この問題は、発掘と言う手法によっては回答を見出すことはできない。私は人類の歴史を、その精神構造の中心をなす「祈り」を中核として見直し、そこに磐座(いわくら)・磐境(いわさか)を見いだしたのである。

注

① グレゴリー・クラーク著「日本人—ユニークさの源泉」サイクル出版会(七頁)

② 前掲書 八頁

③ Claude Levi-Strauss 「日本文化について」TV、NHK教育放送、平成五年四月一五日



(二)



神戸市六甲山、三国岩（高さ10m）

神籬・磐座・磐境

日本では古代祭場のことを神籬（ひもろぎ）と言う。これは霊天降域（ひーあもりーいき）のことで、神が天から降臨される場所と言う意味で、それは聖なる岩や土地また木で

あった。なかでも巨石で構築された神籬を、磐座（いわくら）・磐境（いわさか）と呼んだ。辞典では磐座と磐境を区別していないが、磐座の語源は、巖座（いづくら）で、特別に尊く聖なる神の座という意味である。私の観るところによると、その祭場の主たるご祭神の降臨の場であり、それを取り巻くように周囲に配置されている添え石的な岩または岩組みが磐境であるように思える。したがって磐境は多種多様な種類があり、外国でよく知られている *edolmen*（机石）や *cronelech*（半円形の列石） *tririon*（2個の立石の上に横長の巨石を載せたもの）また *stone circle*（環状列石）などがあるが、特筆すべきは、三種の神器（剣、鏡、玉）をかたどったものが、天文石や亀石や蛙石とともに日本の特徴となっている点である。

他方、磐座には、外国で一般に *menhir* と呼ばれている単一立石の形をとるものが多い。九州の熊本県押戸石遺跡や宮崎県矢岳高原の笠石遺跡のように単一の巨石からなる磐座と、複数の巨石を組み合わせた形態をとるもの、これには、

西宮市の越木岩神社の磐座や六甲山の三国岩の磐座がある。さらに日本では、磐座の数とその配置に特色のあるものがある。ほぼ同形同大の磐座が二つ東西に相對峙する形をとるもの、これは広域における中心的祭場で、九州では、九州山地の主峰・國見岳山頂の磐座、また京阪神地区では、六甲山上に位置する三国岩遺跡の磐座、四国では足摺岬の白皇山遺跡が挙げられる。

神社と磐座

磐座・磐境の構築された時期は、縄文早期以前と言われてきた。磐座を建てた古代人は、その時期を当時の星座を刻んだ天文石または磐座・磐境の配置として残してきた。磐座と星座については別の機会に譲る。

多くの国では岩で構築した古代祭場は、そのままの姿で現在に生き残ってきた。しかし日本では、大きく変化した。気候の温暖化により日本列島が森林に覆われるにしたがって次第に木の文化が発達して、祭場を木造するようになった。神社建築の始まりである。多くの場合、それはまず磐座のまゝに供物を供える弊殿として始まったようだ。やがて人々は便利にしたがって木造の祭場(神社)を山麓に建てて下宮とし山頂の磐座へ足をはこぶことは少なくなった。さらに便利主

義が高まり、人々は、居住地区の近くへ神社(里宮)を建て、やがて遠く離れた山麓の下宮も山頂の元宮としての磐座も忘れてしまったのである。現在八万とも十万とも数えられる神社の多くは里宮か下宮で、山頂の磐座との繋がりが切れてしまっている場合が多いが、磐座のある山と神社が隣接している場合には、奈良の大神神社のように、神社には拝殿があるのみで、本殿は磐座のある裏山となっている。京都の上賀茂神社もその例に漏れず、本殿の西に「御神山」と書いた小さな立て札が立っている。その立て札の遙か先を展望するとそこには磐座のある山がある。また西宮市の越木岩神社は同じ境内に元宮としての磐座と神社建築が共存している珍しい例である。

一、単一立石の磐座

九州・押戸石遺跡

阿蘇の北、南小国町にある「押戸石」遺跡。昭和六二年国見岳の調査のために熊本に滞在していた私は、地元新聞に巨大な石が一〇〇個ほどあり、鬼の落としたお手玉と言われているという記事を読んだ。同行の中西旭先生を誘って現地を訪れた。Fig.(1)は、その全景を空中から写したものの。Fig.(2)はその中心的な岩すなわち磐座。この写真は磐座の南面を示し

ているが、西面 Fig.3(3)は、はるか玄界灘を睨むような形が仕組まれており、その下には神代文字が書かれている。東面には太陽を象徴するペトログリフが刻まれている。磐座を頂点として多種多様な形状の磐境が、三段に分れて配置されている。なかには剣のようなもの Fig.4(4)、動物の集まりのような群れ、象のようで象でない進化の途上にあるかの動物のような巨石 Fig.5(5)など興味はつきない。中西先生はこの

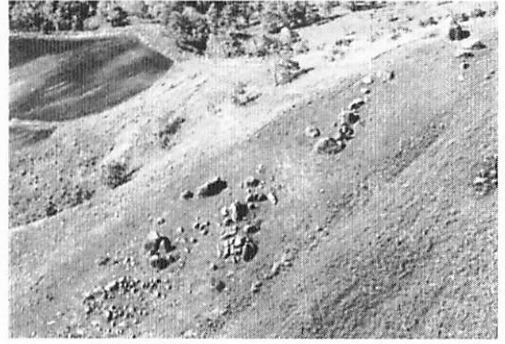


Fig.1 押戸石遺跡：その全景（南小国町提供）

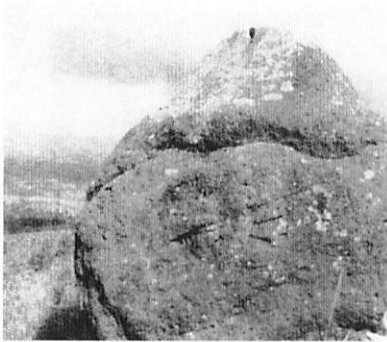


Fig.3 押戸石遺跡の磐座の西面

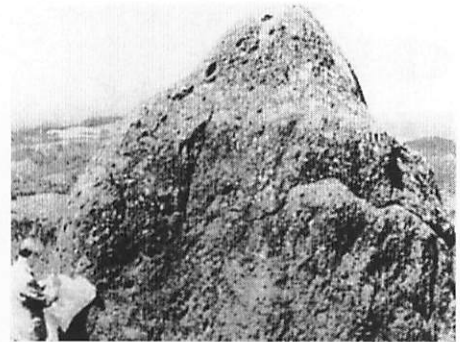


Fig.2 押戸石遺跡の磐座と中西旭博士

遺跡を、古代の「三段神籬（ひもろぎ）」と結論付けられた。橋本町長は、さっそく町指定の文化財に指定し公の保護を受けることになった。

九州・えびの市郊外「笠石」遺跡

熊本—宮崎—鹿児島—鹿兒島の三県に跨がった矢岳高原には広範囲に跨がる神籬の跡がある。この笠石磐座 Fig.6(6)の前には広大な広場があつて無数の人々が集まつて祭りをしたと考えられるが戦後の開拓で牧場となり、累々とあつた磐境は爆破、または破壊もしくは地中に埋められてしまったと言う。周辺には前列の中が十五メートルにおよぶ列石や日本スフィンクス



Fig.4 剣のような磐境と中西博士

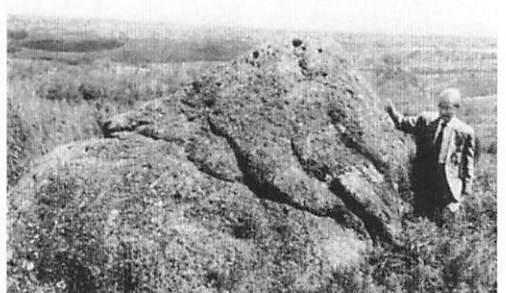


Fig.5 象のようで象でない進化途上の動物か？

神戸市・六甲山「天の穂日」の磐座
六甲山山頂の阪神電鉄カントリーハウス・人工スキー場の丘の上に神籬が残っている。古事記によれば、天孫降臨に先立って地上を整備するために降臨された天照大神の第二皇子天穗日命（あめのほひのみこと）の磐座。F.9(9)礎石の上にしっかりと載っている。ここに人工スキー場を設置するとき水道を敷くために多く岩を排除したと言われているが、な

とよばれる「大ひな鳥岩」通称「天狗岩」があつて現在も地の信仰を集めている。笠石磐座には、鏡石F.9(9)が添えてある。



Fig.6 笠石遺跡の磐座 矢岳高原、えびの市



Fig.7 笠石に添えられた鏡石



Fig.9 こしき岩の磐門

を神社は「霊岩・こしき岩」と呼んで前に祠を建てている。由緒書きによると、大阪城築城のためにこれを切り出そうとしたところ、忽ち岩中より鶏鳴し、白煙立ち上り、その霊気に打たれて石工たちは転げ落ちたと書かれている。この巨岩は、その大きき故に神社と人々に畏敬の

お多くの磐境にかこまれている。この山の麓の芦屋市にある芦屋神社は、同じ天穗日神をご祭神としており、この磐座の下宮に当たる。
二、複数の岩から成る磐座
西宮市・越木岩神社の磐座
元宮としての磐座と下宮としての神社建築が一つの境内に共存する稀有の神社。神社の本殿の背後に聳える高さ一〇メートル、周囲三〇メートルの巨岩

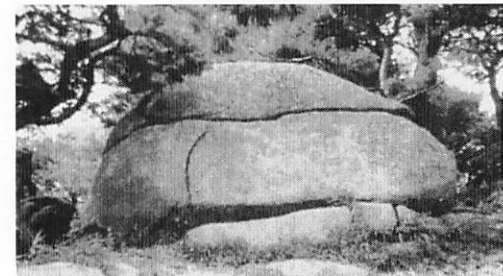


Fig.8 「天の穂日」の磐座



Fig.10 こしき磐の磐座

念を起こさせているが、実はこれは南座であり辺境（へつ）で、機能的には岩門（いわと）(Fig.9)であって、さらに尊い磐座は、背後に続く鬱蒼とした林の中に人知れずひっそりと佇んでいた。磐座(Iwajima)は、一六〇センチ四方の礎石の上に、人型のように組まれている。古事記研究家・荒深道斉（一八七〇—一九四九）によると、正面中央に一段と高く組まれている磐は天照皇大御神（あまてらす すめおおみかみ）で、その左右と背後を取り巻く岩は、その五柱の皇子と三姫を、さらにこの磐座の直下に広がる二股の巨石は天孫和氣命（ににぎのみこと）を象徴し、この奥座に古事記に書かれた三代にわたる神々が祀られたという。また現在は甌（こしき）または越木という漢字が当てられているが、言霊（ことだま）によると、「こ」は神の心、「し」は霊に通じて神、「き」は現れる事を意味し、総じて神の心の現れることを意味した。後世に

なって「子敷き」に通じるところから子孫繁栄の神として多くの参詣者を集めた。しかし背後に生えた一本の松の木を切らなかつたために先の阪神大地震で正面の岩が飛び出した。木の根が伸びて岩と岩を離していたのであった。

三、磐境いろいろ

「剣岩」

神戸市六甲山の中腹にある「剣岩」(Fig.11)は、芦屋市の奥池にある。磐境は、磐座を囲む垣根のように形状の多様な岩または岩組みとして配置されているが、なかでも天照皇大御神を祀った三国岩や天の穗日命の磐座のように特に尊い祭場の周辺には、「三種の神器」を象つたものが配置してあり日本の特徴となっている。「三種の神器」は、天皇家の王位継

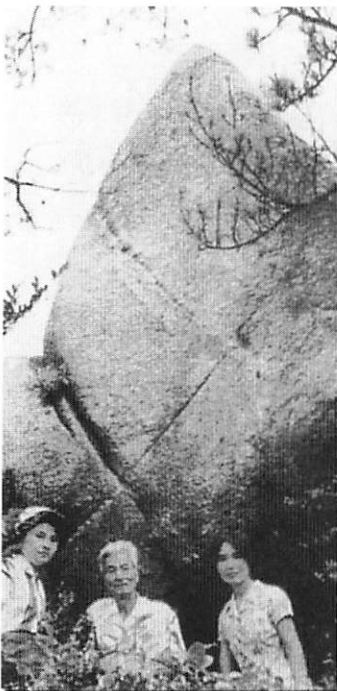


Fig.11 剣岩

承の神器だけではなく、当時の道徳のシンボルであったようだ。つまり「鏡」は神の心を映し、また人の心をも映しだす。「剣」は悪にたいする勇氣、「玉」は人々の間の協力・和を象徴していた。この六甲山の「剣岩」は、「天の叢雲（あめのむらくも）の剣」で、次の「八咫（やた）の鏡」岩とともに、磐境ではあるが、それ自身尊く、磐座でもある。「剣岩」は、高さが一〇メートルで、表面にはオリオン座の三つ星が頂点の大犬座のシリウスに向かって刻まれている。またこの岩に降臨される神は、武甕槌神（たけみかづちのかみ）神で、この近くには「経津主神（ふつぬしのかみ）」を祀った「風の岩」もある。周知のように、この二柱の神は祓いの神で『古事記』によれば、天若彦命を誑（たぶら）かした邪女（さぐめ）を祓うために天神は、この二柱の神を招ばれ、その稲光と音響、強風によって太平洋の彼方へ吹き飛ばして日本列島を祓い清められたと言う。

「八咫の鏡」岩

「剣岩」の南の六甲山山麓の芦屋市の「六麓荘」にある。直径が四m、そして鏡の縁を飾るフリルは今も残っている。磐境であるとともに、非常に尊い磐座でもあるので、昔は、これを御神体として神社ができたほどだったが、戦後はまっ

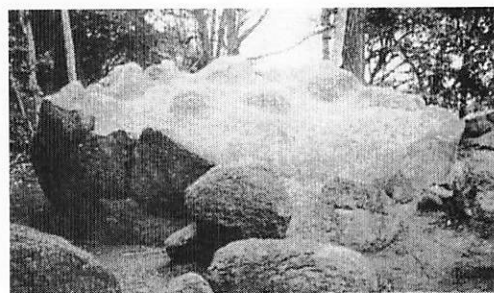


Fig.12 やたの鏡岩

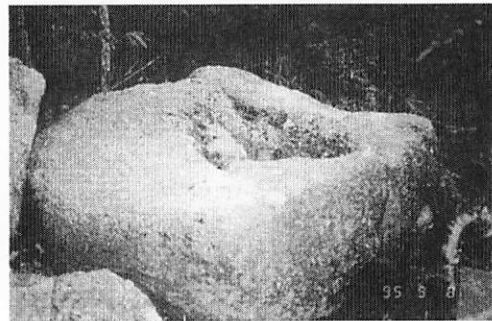


Fig.13 潮干満玉

たく顧みられることなく、文化財の指定も受けられないまま、周辺とともにさびれ、芦屋大学が、目の前一mの所まで拡張し道を塞いでしまった。校舎の建築や阪神大震災の影響を受けて、最近はやや傾いたかのように思われる。降臨される神は八意思兼神（やごころおもおいかねのかみ）。近くに潮干満玉 Fig.(13)（直径190×150cm）が配置されている。

「亀石」

尊い磐座には、動物をかたどった磐境が添えてある場合がある。なかでも忠実とされている亀が多し Fig.(14)・Fig.(15)。鳥や蛙、時には矢岳高原に見られるように鯛や鯨などもあ



Fig.14 亀石 (前面)

る。亀の向かっている先に磐座あり。磐座への道に迷った
ら、周辺の岩の配置や亀石に聞くと良い。

この亀石は矢岳高原の「大ひな鳥」岩に向かつて配置され
ていたが、一昨年九州電力の開発によって跡形もなく撤去・
粉碎されてしまった。痛ましい限りである。

「顔石」

西宮市の甲山^{かぶとやま}周辺は県立森林公園になっているが、ここは
昔、甲山を中心とする神域であったので、磐座・磐境が多
い。そのうちの一つが顔石(仮称)。登山クラブはこの岩に
金を打って登山の練習をしている。反対側は絶壁なので見る



Fig.15 亀石 (側面)

る。亀石が彼方の山から磐座
に向かつて深々とお辞儀をし
ている姿が往々にして見られ

人は少ないがその反対の面こそ重要で、そこに、目鼻があ
り、大きく口を開けて、東南に向かつて雄叫^{おたけび}をしている。東
南の方角には大阪や奈良がある。背景に見える丸い美しい山
は甲山^{かぶと}。

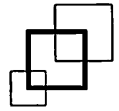


Fig.16 顔石 (東面)

以上の磐座・磐境についての研究は、大方を古事記研究家・荒深道
斉とその後継者・日立道根彦の調査・研究に負っている。

参考文献

- 荒深道斉著「天孫古跡探查要決」道ひろき発行
- 荒深道斉著「擧て磨け八咫鏡」道ひろき発行
- 中島 和子「南米ペルーと日本に見られる太陽崇拜の古代祭場」
写真 1981年10月は中西天珠、他は筆者による



(三)

二つの磐座の相對峙する神籬^{ひもろぎ}

一般に多く見られる磐座^{いわくら}は、その祭場の主たるご祭神の降臨を願う単一の磐座を中心として、その周辺に、多数の様々な形態の磐境（いわさか）が取り巻くように配置されている場合が多い。単一立石ではあるが、その磐座が一枚岩で出来ている場合もあるが、複数の岩の組合せである場合もあることは、前号で述べたとおりである。

しかし、稀には二つの磐座が相對峙して祭場の中心をなしている場合がある。この場合には、その磐座はかなり広範囲の地域のほぼ中心に位置している場合があつて、私の知るものとしては、九州のほぼ中心に位置する国見岳山頂の磐座、阪神地区の中心を成す六甲山の三国岩の磐座、足摺岬の白皇山さらに南米のほぼ中心を成すマチュピチュ遺跡などが挙げられる（参考文献①）。

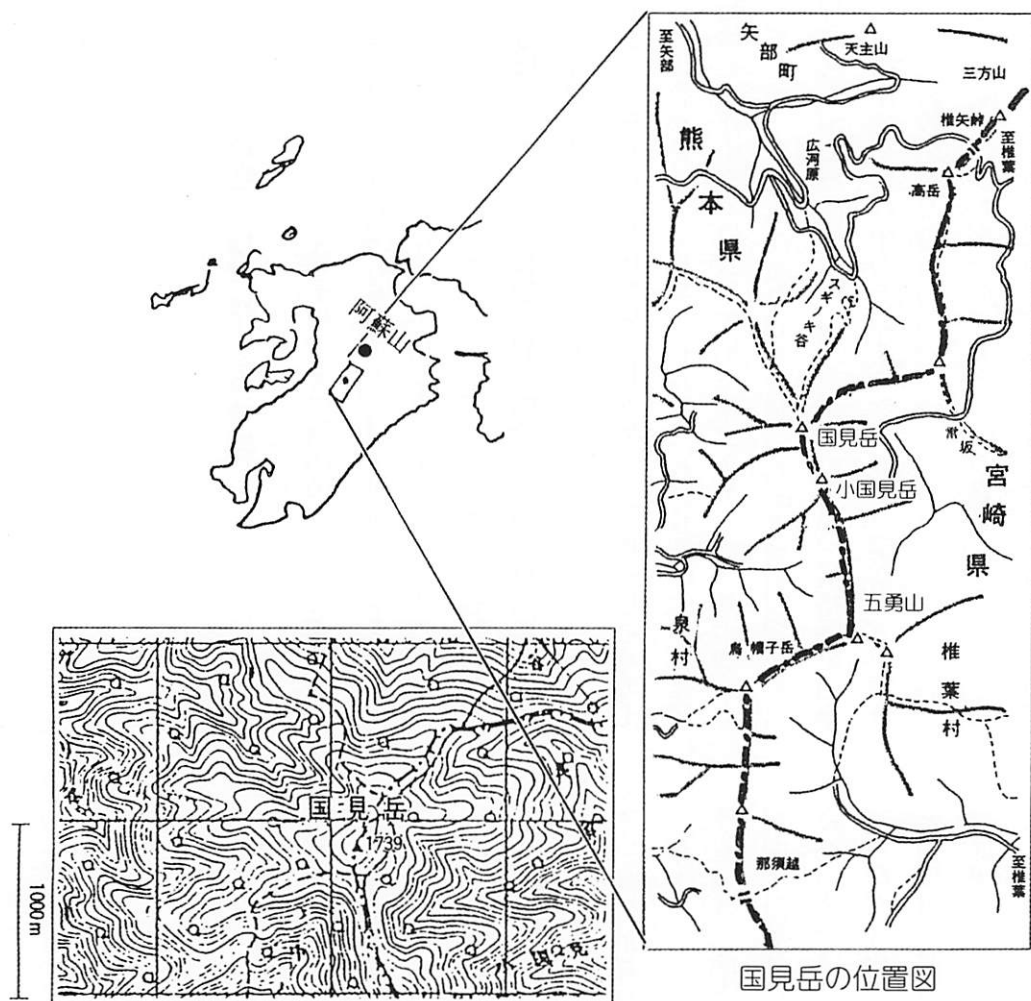
なぜ磐座が二つあるのか、また二つの磐座それぞれがどのような意味をもつかについては、これを建てた古代人の世界

観・宇宙観に深く根ざすものであるから、歴史的に遠く離れてしかも物質文明に汚された我々現代人が知ることは殆ど不可能なほど難しいが、幸い、古事記研究者であり若年のころから磐座の調査研究を重ねられてきた中西旭博士^{あきひろ}が昭和六二年この国見岳を踏査された報告書があるので、ここに紹介したい（参考文献②）。

(一) 九州山地の主峰・国見岳の磐座

1 地理的環境

国見と名のつく山は九州に多数存在するが、ここで取り上げる山は、熊本県と宮崎県の県境に跨がる古生層から成る九州山地の最高峰（1739m）で九州でもっとも古くまた三番目に高い山である。その位置は、阿蘇山の南方約四〇キロのところ即ち九州のほぼ中央である。行政的には、熊本県の泉村と矢部町、宮崎県の椎葉村に属し、九州国定公園内にあり特別保護区でもある。また南方に位置する小国見岳と二上山^{ふたみやま}をなし、地元では大国見岳（おおぐるみだけ）と呼ばれてい



国見岳山頂周辺の地形

国見岳の位置図



図A 国見岳山頂—南方 (小国見岳) より撮る

る。東は日向にいたる耳川と延岡にいたる五ヶ瀬川、西は熊本にいたる緑川の源流である。

山頂は緩やかな円頂峰であるが、その中心部に堆積岩から成る釣鐘状の山塊―底辺が直径約三十メートル、高さ約七メートルが突出している(図A)。その北面の石段をあげる時、両側に巨石が配置されていて岩門(いわと)を構成している。山塊の頂点は、直径十五メートルの平地で、その東端(宮崎県)と西端(熊本県)に山岳型の磐座が築かれていて、東西に相對峙している。二つの磐座は、どちらも高さ一・二メートル、幅五メートル余で、左右に羽を広げたような形をしており同形、同質ではあるが、配置状況と形状、役割にそれぞれ独自の特徴がある。現在、東磐座(宮崎県側)は、大幅に削られて原型を留めていないが、その頂点は美しい尖状をなしていて威風堂々の雄姿をみせていたことを写真は伝えている(写真1)。これに対して、灌木の影にあったために大幅な破壊を免れた西磐座(熊本県側)の頂点は尖状を成しておらず、深さ三十センチの空間が空くように岩が組まれている(写真2)。二つの磐座の間には九メートルの間隔がある。古代においては神官および統治者は座礼によって神事を行なったと思われる。また階段と岩門のある北面にたいして、南面は絶壁になっており、絶壁の下には小国見岳にいた

(写真1)

東磐座―荒(アラ)御魂を祀る。
昭和41年写す。



(写真2)

西磐座―和(ニギ)御魂を祀る。
この前に弊殿の柱穴が見つかる。

る平坦な幅広い原野が広がっている。この地形からみて、古代には、この原野に無数の大衆が集まり、山頂を仰ぎ見、神官の神事に合わせて祀りに参加したものと思われる。

2 ニギミタマ（和御魂）とアラミタマ（荒御魂）

山岳型の同型の磐座が二つ東西に相對峙している国見岳の状況を、中西博士は伊勢の皇大神宮の建築様式との共通性を指摘して次のように説明されている。

「伊勢神宮では、内宮と外宮とが、同型の社殿をもって東西に對峙するだけでなく、その内宮も正殿と荒祭宮とが同型の社殿をもって南北に呼応する」。それは天照大御神のニギミタマ（和御魂）とアラミタマ（荒御魂）がそれぞれに祀られているもので、まったく同様に外宮においても正殿と多賀宮とが、ニギ（和）とアラ（荒）ヒモロギの対応をなしている。

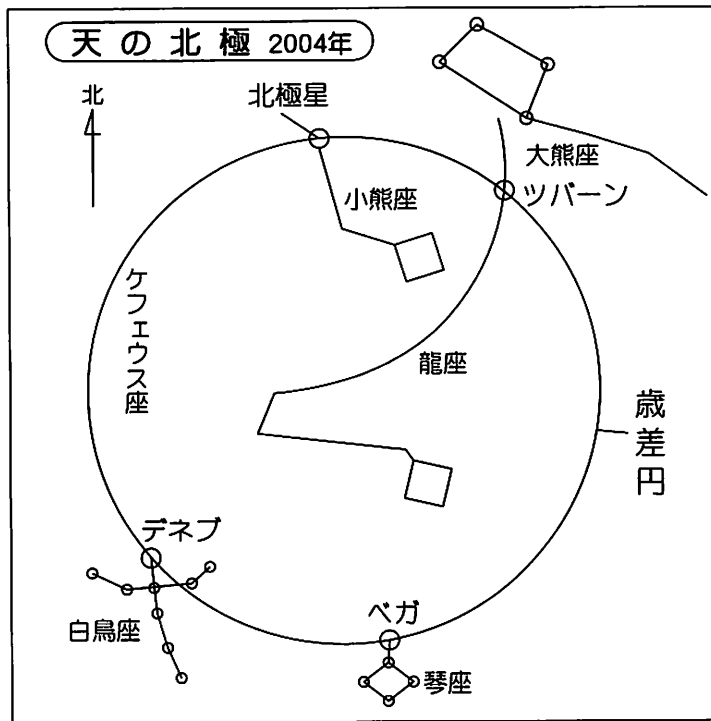
「これを国見岳頂上の両磐座についてみるに、熊本県側の西磐座は、背後に灌木茂り、巨石群もその頭部を出し、やや低位にあつて頂上のすべてを引き込む体制にある。これに對して東（宮崎県側）のそれは、わずかではあるが高位にあり、下界が眼下に全望されると共に、風雪はすべてまともに受ける状況にある。ほとんど同質・同型であるが、いずれが

主たるヒモロギ（神座）としてのニギ（陰）であり、アラ（陽）であるかは一見にして自明とされよう」

すなわち、西側の磐座がご祭神のニギミタマであり、東側の磐座がアラミタマの神座であり、この両磐座の神気が相呼応して極めて尊い祭場を構成していたのである。中西博士はこれを、まことに慶賀すべき事態と結論づけられている。

しかし、博士はこの山頂に「慶賀すべき事態」と共に「慨嘆されてやまない現象」をも見いだされたのであった。これについては次章の(四)で再び取り上げるとして、今回は、伊勢神宮に引き継がれた建築様式の原則が、すでに有史以前の遙か昔に磐座のそれとして定着していたことに注目を集めたい。

国見岳の磐座について更に付記すべきことが三点ある。一つは、その後の発掘によつて西磐座の前に一間社ほどの社殿——それは多分弊殿と思われる——が建てられていたことが明らかとなつたことである。これに對して、東（アラ）磐座の前は岩面が広がつていて社殿の跡はない。即ち二つの磐座のうち、ご祭神のニギミタマを祀つた西磐座の前で、恒例的な祭祀が行われたことを示している（写真2）。しかも社殿跡の四隅の柱穴に付け加えて、伊勢神宮であれば「心の御柱」の位置に、深さ四十五センチの柱穴が見つかった。これは国見岳の磐座が少なくとも九州における太陽崇拜の中心的祭場



(図B) 天の北極

であったと言えるのではないだろうか(参考文献③)。

3 磐座の示す星座

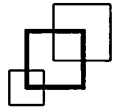
次いで注目すべきは、二つの磐座を含めてこの神籬(ひもろぎ)の複数の岩石群は、「天の北極」の星座を表示しているということである。磐境(いわさか)のなかには、当時の星が北極星であったかを示す星座を彫ることによって磐座の構築時期を残した天文石がある。星座は、一個の岩または磐座そのものに彫られている場合が多い。しかし国見岳の場合は、直径十五メートルをなす山塊すなわち神籬の頂上全面に「天の北極」の星座が岩によって再現され、そこには「天の北極」の「写し」が作られているのである。この言わまもなく尊い天と地の呼応は一体何であろうか。この磐座には特別な意味があると言わざるを得ないのである。

ついでながら国見岳の神籬に表示された天文の時期は、北に北極星としての目立つ星はなく、東に小熊座のアルファ一星(現在の北極星)があり、西に琴座のベガが輝いていた時期である。歳差円の一周を約二万六〇〇〇年とすると、これは、その四分の三年すなわち今から約一万九五〇〇年前を示す(図B)。しかし歳差円の二周目であれば、これに二万六〇〇〇年を加えるから四万五五〇〇年前となる。四周目であ

れば、九万七五〇〇年前となる。これを計算式にすると
(19,500 + 26,000x) 年 但し x=10
となる。xが果たして何であるか、今のところその決め手と
なるものは見つかっていない。

参考文献

- ① 中島和子「南米ペルーと日本に見る太陽崇拜の古代祭場について」古代遺跡研究所刊行誌、第1号5—31頁
- ② 中西 旭著「国見岳の磐座についての所見」縄文ジャーナル、第5号38—41頁
- ③ 中島和子「九州山地の主峰・国見岳祭祀遺跡の社殿跡地の発掘調査報告」京都精華大学紀要第七号39—53頁



(四)

二つの相對峙する磐座をもつ神籬

(二) 南米ペルーのマチュピチュ遺跡

日本の古代祭場を取り上げている最中にペルーの遺跡の分析を挿入するのは、突飛と思われるかも知れないが、もともと日本で磐座・磐境が構築された時代は、国家発生以前の往昔で、この地上にはいまだ国益に基づく国境は存在せず、社会は血縁に基づく氏族制度によって組織づけられていた。後ほど世界地図を色分けした宗教もいまだ発生せず、太陽崇拜と自然崇拜とアニミズムが普遍的であった時代であるので、現代人がこれらの古代祭場を正しく観察・分析するためには、頭から国境をとり払うことがまず肝要である。さらに現代人が知らずして抱いている古代人への偏見からも脱却しなくてはならない。しかし大方はどちらも自覚されていないだけに、非常にむずかしい。

実は、私も例外ではなく、ペルーでの経験をもって自分の

限界を教えられ、視野を広めて古代人に一歩近づくことが出来た。マチュピチュ遺跡の紹介は、その過程の紹介でもある。まず、この遺跡の歴史的背景をみよう。

1、歴史的背景

十五世紀半ばから十六世紀前半にわたって繁栄を続けたインカ帝国は、一五三二年に始まるスペイン軍の侵略によって一五七二年に滅亡の悲劇を迎える。インカ皇帝にたいするスペイン軍の騙し打ちには有名である。インカ人は、皇帝亡き後も幾多の抵抗を試みたが成功せず、ついに逃亡・分散の道を選択せざるをえなかったのである。

アンデス山脈奥地のマチュピチュへ逃げ込んだ人々は、例のインカの石組みで住宅を作り、政庁を置き神殿を作り、日時計を置き、こんこんと湧き出る水を使って水浴びの部屋を身分毎に作り、周辺の棚田には豊富な野菜を植え、リヤマを飼って織物をし、時には一万人とも二万人とも言われる都市を形成していたと言う。しかし悲劇を終わらせることはでき

なかった。スペイン軍の追跡の手は、この山奥にまで達し、最後に残った女・子供まで殺戮され、その後三五〇年もの長い間、この空中都市は草木のなかに深く埋もれてしまった。①
 ようやく一九一一年になって、アメリカの若い考古学者ハイラム・ビンガムによって発見され、世界的な注目を集めることになった。それ以来今日まで毎日何千人という大勢の観光客が世界各地からこの地を訪れることとなったのである。

2、インカのなかのプレ・インカ遺跡

ところで、私がマチュピチュ遺跡に興味をもったのは、現在見られるインカの石組みで有名な空中都市と呼ばれている遺跡ではなく、次の点にあった。何故この地にかくも大勢の人達が集まり隠れ家を作ったか、であつた。遠くで見つかりにくい場所は山中には他にもあつただろう。しかしこの特定の地に集中したのは特別な理由があるはず、それは何か、で

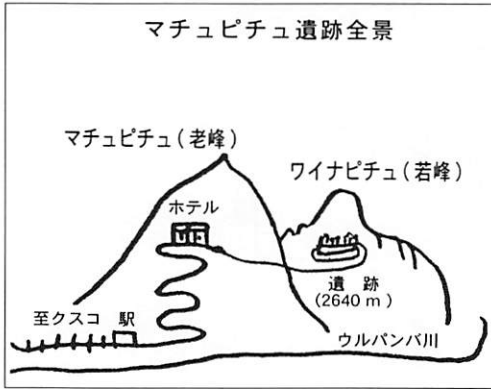


Fig.1 マチュピチュ遺跡全景

あつた。堂々たるあの立派な石組み都市を形成したことを考えると、ただ見つかりにくいという消極的な理由からとは考えにくい。そこにはもっと積極的な確信、ここへ来ればきつと守られて安全にちがいないという確信があつたように思われる。何によつてそのような確信が得られたのだろうか。



Fig.2 インカの石組み一剃刀の刃も通らぬ

私は、多分この地に古来の尊い祭場が存在していて、人々の崇拜を集めていたのではないかと考えた。神の住む祭場へ逃げ込めば神の力によつて守られるに違いないという確信は、大勢の人をここに集中し、敵の目に目立つにもかかわらず石組みの都市を築いた。この仮説が正しければ、現在観光に供されている空中都市のなかに、昔の祭場の跡が残っているはずである。それはどこにあるのか、昔の祭場は何によつて作られ、どのような形をしていたのだろうか。つまりインカの空中都市のなかのプレ・インカ遺跡を探すこととなつた。そこで、高所に登つて遺跡を全望した。正面に見える尖つ

た峰の下には緑の広場を囲んで左右にインカの石組みの建物跡が並んでいる。制服を着た大勢の先住民が清掃に従事していて草木は美しく刈られ、整備と保全には万全が尽くされており、さながら宮廷の庭を見る感じすら覚えた。

そんななか正面の山峰の直下の麓に、周囲と全く異なつて、草木ぼうぼうのまま手をつけていない場所のあるのを見つけた。中央の広場からかなり高い石垣を三段登つた上にあつた。何事だろうと不思議に思つて近づくと、驚いたことに、そこにはインカの石組みはなく、写真4が示すように、複数の巨石が自然の形のまま少し整形されて組まれていた。何とこれは日本で見なれてきた磐座・磐境の岩と同類ではないか！改めて遺跡の周囲を見直した。すると遺跡の南部に同様の巨石がごろごろ山積している。地元の人は、これはインカが使わなかつた岩だと言うが、私は逆に、インカが自分たちの石組み建築をするために取り除いた岩であるように思つた。これらの岩はひとつひとつ個性のある岩でこれらによつて構築されていたインカ以前の祭場は如何ばかり素晴らしいものであつただろうか。威風堂々たる日本の磐座の姿が彷彿として頭に浮かんだ。そしてこの時、私の頭から国境が消えたのだった。

3、二つの峰の南北に相對峙する神籬

視野を改めて遺跡をみると、誰もがマチュピチュと思ひ込んでいる写真3の正面の峰は、マチュピチュではなかつた。それはワイナピチュ（若峰）と呼ばれており、一回り大きい老峰とペアを成している。その老峰



ワイナピチュ
若峰、huayana Picchu

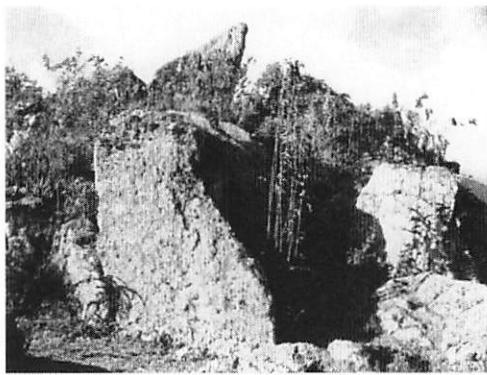


Fig.4 プレ・インカ祭場の跡か？

は、遺跡を挟んだ南の対岸にあり、これこそマチュピチュと呼ばれていた。ワイナピチュ（若峰）とマチュピチュ（老峰）は同形・同質ながらそのサイズや在りように少しの差があつた。老峰は少し高所にあつて一回り大きく全山岩でその頂上は尖がり天を突くばかりに空高く突出して居る。背後に妨げるものなく下界を全

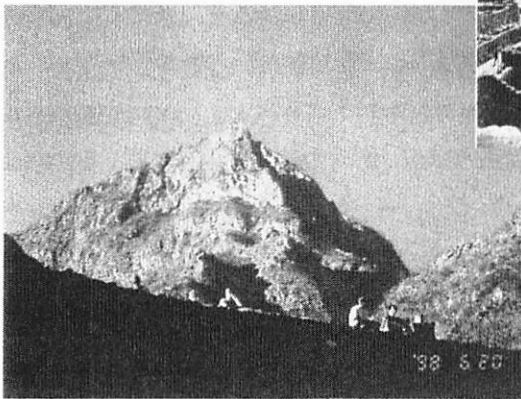
望し、風雪のすべてをその身で受け止める態勢にある。一方若峰は、少し低位にあって木に覆われ、目の前の遺跡(昔は祭場)のすべてを引き込み抱える体制にある。背後は山並みに覆われて展望はきかない……と、こう二つの峰の特徴を説明すると、その声は、九州山地の主峰・国見岳の二つの磐座を説明した中西旭の声と重なった。前号に紹介したように、中西旭は国見岳の二つの磐座について、次のように説明している。

「国見岳の東磐座は、わずかながら高位にあり下界が眼下に全望されるとともに、風雪はすべてまともに受ける状況にある。西磐座は、少し低位にあって頂上のすべてを引き込む状況に在る。背後は灌木に覆われて展望はきかない。ほとんど同型同質であるが、西磐座が主たる神座で、ご祭神のニギ(和)ミタマを祀り東磐座はアラ(荒)ミタマを祀る。」そして「この両磐座の神気が相呼応して」またとなき尊い太陽崇拜の祭場を作りあげていたと言う。

これをマチュピチュに当てはめると、磐と峰、東西と南北の対峙の相違こそあれ、遺跡の南に聳えるマチュピチュは、ご祭神のアラミタマを、北のワイナピチュはニギミタマを祀り、主たる神座はワイナピチュということになる。不思議にもその主たる神座であるワイナピチュの前に祭場が作られて



ワイナピチュ
Fig.3 若峰、huayana Picchu



マチュピチュ遺跡
Fig.5 老峰 Machu picchu

いたこと、またその峰は山岳型をなしてはいるが頂上は尖って居らず角ばった巨石が群立していてその中に神の座と思われる腰掛け石があるという。つまり神の降臨を祈願したのは、南のマチュピチュでなく、北のワイナピチュであり、こちらが主たる神座なることを示している。これは、国見岳の西磐座が山岳型ではあるが、東のそれが全く尖状であるのに対して、西は頂上に穴が空くように岩が組まれており、そこに榊（または御幣）を立てるようになっていて、さらにこの西磐座の前に昔の社殿跡が発見されて、この磐座が祭場の中心であったことが判明したと全く符合するのである。

巨石で構築された古代文明の祭場は、四大古代文明をはじめめとしてその多くは今日までそのままの姿で残存している。しかし日本では、その後の温暖化によって木の文化が発達した結果、磐座は木造建築による祭場すなわち神社建築へと変遷し、それはまず磐座の前に一間社いんしゃほどの弊殿を建てることから始まって、次には山麓に下宮を建て、さらに後世になると、人々の便宜にしたがって居住地近くに里宮を建てることになった。

ところで、国見岳でみられる二つの磐座の在りようが、日本では伊勢神宮の建築様式に引き継がれているのみならず、



国見岳
Fig.6 西（ニギ）磐座



国見岳
Fig.7 東（アラ）磐座

太平洋を挟んだ対岸のアンデス山脈中のプレ・インカの祭場にもみられるとは、一体どういう事であろうか。九州のほぼ中央に位置する国見岳と南米のほぼ中央に位置するマチュピチュ……これは、単なる偶然であろうか、それとも文化的伝播によるものであろうか。

4、多発性偶然か文化的伝播か

偶然だと言ってしまうえば簡単である。しかし二つの事象の間に真実何の関連もないことを証明することが果してできるだろうか。できないのである。他方、伝播であると言うためにも困難が伴う。伝播であるためには、古代人が太平洋を渡ったことを証明しなくてはならない。しかし殆どの人は否定する。なぜなら、当時は太平洋を渡るに足る大きな船がなくレーダーもなく無線もなかった。同じ状況のもとでは現代人とても可能なはずはない。そして「現代人にできないことが古代人にできるはずはない」と現代人は深く確信している。

私は、マチュピチュでの観察をもつて、縄文人がはるか昔、太平洋を渡ってマチュピチュと言う太陽崇拜の祭場をアンデス山中に構築したと主張しているのではない。私は、まさかと思うことでも、事実を事実として認めねばならないと

主張しているのである。まさかと思う側に問題があるかも知れないからである。現代人の思考には国境がある。近視眼的で歴史的想像力に乏しく、そのうえ古代人に対する偏見がある。私は、何故そうなのかを今は理解できなくても、事実を事実として認識する必要があると主張しているのである。発見される事実が多くなればなるほど、私たちの固定観念を破るきっかけとなる。すでに私たちの理解を越えた事実が沢山伝えられている。

まずマチュピチュ遺跡について言えば、このすぐ傍にナスカの地上絵のあることを見逃してはならない。この二つの遺跡は山と海に離れているが、東西に位置している。誰が何故あの地上絵を描いたのかについては、多くの思索と調査がなされているが、いまだに結論は出ず、宇宙人のせいにする見方もあるが、それはあまりにも非現実的だ。大切なことは、ナスカにあのような地上絵を画くことの出来た人々なら、アンデスの山中に多少の整形を施しながら太陽崇拜の祭場を作ったとしても決して不思議ではないということである。

またアンデス山脈の西には、世界一長いと言われる砂漠地帯が太平洋に沿って続いており、その砂漠には数知れぬ多くのピラミッドが存在することも、この地の古代文明を考える場合には見落とすことは出来ない。私の会った現地考古学

者は、首都リマの近郊で発掘をしているが、そこには、ピラミッドが三十二基あると言うので、思わずわが耳を疑ったものだった。しかしその後北部のトゥクメ市を訪ねた時、そこにある二十六基のピラミッドに案内されて、ようやく信じることができた。その規模はかなり小さく、また岩によってではなく砂漠特有の日干し煉瓦によって構築されている点、エジプトやマヤ文明のピラミッドと相違しているが、明らかにその多くは太陽崇拜の祭場だった。しかしこの地を襲う数年または十数年に一度のエルニーニョによる豪雨が日干し煉瓦に掘られた彫刻を流し去り、ただの砂山と化したため、ピラミッドはその本姿を長年見過ごされてきたのだった。しかし大切なことは、平地における数多くのピラミッドの存在は、その総合とも中心ともなる大祭場をアンデス山中に築いたとしても不思議ではないということだ。今でもアンデスの山奥海拔4000米の高地で、南米各地から集まった先住民による太陽の祭りが行われていることは周知である。太陽崇拜の層強烈であったインカ帝国の首都クスコ近くのサクサイワマンでも、インカの四大地区からの代表団が、俳優の演じるインカ皇帝を中心に集まり、毎年盛大かつ熱烈な太陽崇拜を行う。

5、古代における世界交流

リマへ戻った私は、天野博物館[®]を再訪した。小さいながらも逸品を集めたこの博物館の二階の一隅に十体ほどの人面土器を見つけて、思わず息を飲んだ。人面土器の人面は明らかに地元の間人ではなく、五〇〇年から一〇〇〇年前の昔にこの地を訪れた外国人の顔であった。中近東から来たアラブ人、アラビア人、アフリカの黒人、地中海かヨーロッパから来たと思われる人々そして中国か日本からと思われるアジア人。彼らは大西洋や太平洋を渡ってこの地にやって来たのだった。これらの外国人は「稀人^{まれびと}」として尊ばれ、人面土器として記念されたと館長の説明。彼らが海を越えてやってきたということは、ペルーからも世界各地へ出かけたことでもある。つまり私たちには想像もつかぬことだが、この人面土器は、国境のなかった昔、この地球上の人々は海を越えて交流していた動かぬ証拠ではないだろうか。今後発掘が進めばさらに歴史を遡って多くのことが判明するだろう。

6、太平洋を渡った縄文人

ペルーの北に隣接するエクアドルのバルデビアで約六〇〇〇年まえの地層から大量の珍しい土器とその破片が発掘された。駆けつけた北米スミソニアン研究所の二人の考古学者に

は、一目でそれが縄文土器であることが分かったが、まさかと信じられぬままバルデビアの海岸を散策した。その時多くの流動物のなかに「ワカヤマ」と書かれた流木を見付け、はっと気づいた。太平洋の潮流は時計回りだから、その潮流に乗れば日本からこの地へ来ることは可能だと。一九六五年、この二人の考古学は、発掘された土器の写真をもって来日し、土器の図柄の示す製作地を廻り現場の土器と照合して、さらに自信を強めた。しかし日本の考古学界は認めなかった。日本のものとは材質や形状が違おうと言う理由らしいが、私は「人」と「技術」と「土」さえあれば、縄文土器は世界のもので作ることが出来たように思うが、多分、縄文人が太平洋を渡ったなど、誰も信じることがで



ナスカ文化
(アラビア人)



インカ文化
(アフリカの黒人)



チムー文化
(ヨーロッパ人)



モチーカ文化
(アラブ人)



モチーカ文化
(アジア人)

きなかったのだろう。③

一九九七年夏、ペルーからの帰途、ワシントンDCの Smithsonian 研究所にバルデビアの調査を手掛けた考古学者ベティ・メガー博士を訪ねた。彼女は次のように語った。

「私たちは、この三十年間説得を続けているのですが、日本の考古学者たちはいまだに、縄文土器と認めてくれないのですよ」

私はエクアドルの三大都市の博物館をまわって、そこに展示されているバルデビアから発掘された縄文土器を見た。いずれも美しい土器だったが、説明には JAPAN の J も、縄文土器の J の字も書かれてはいなかった。日本の考古学者の見解は、太平洋の彼方にまで影響しているようだ。

註

- ① 最近の調査で、発掘された一七四体の遺体は男女半々で殺害された跡はないとのことで、新しい謎を生んでいる。
- ② 天野博物館：天野芳太郎（1898—1982）は、一九二八年ペルーへ渡り、現地の歴史的文化財が埋もれたまま放置されているのを見て驚き、自ら天野商会を開いてその収入を財源として発掘を行い、一九六四年ペルーの首都リマに小さいながらも逸品を集めた博物館を創立する。現地と日本のアンデス研究に及ぼした

彼の功績は比類なく大きい。毎日日本語による館内ツアーを行っている。予約が必要。

③ 大洋を渡った古代船と古代航海術の再現

一九四七年 北欧の民俗学者ハイエルダールはポリネシア人がもともと南太平洋を渡って来たことを実証しようとして自ら同じ隻船コンチキ号をつくり、ペルーからポリネシアまでの八〇〇〇キロを一〇日かけて航海し成功した。一九七〇年再び古代エジプトのパピルス船で大西洋横断に成功した。同じ年、古代ポリネシア人の古代航海術の有効性を実証せんとする一七人のハワイ人が、昔使われた双胴型カヌー・ホクレア号でハワイからタヒチ往復を古代人と同じくただ太陽と星、海の色と雲の形によって航海し見事に成功した。

現在、葺船で太平洋横断を志す若者が日本に集まっている。ペルーのチチカカ湖で訓練をうけ、現在「カムナ葺船プロジェクト」を主催する石川仁は言う。

「昔から日本は豊葺原の瑞穂の国と言われてきたその日本で葺船を作り、古代人に習い黒潮に乗って太平洋を渡るのだ」

参考文献

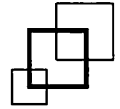
中西旭「国見岳の磐座についての所見」

マイケル・ダドレイ著「神と人と自然の共生―古代ハワイ人の世界観」

たちばな出版社

中島和子「南米ペルーと日本にみる太陽崇拜の古代祭場について」

当研究所発行誌第一号



(五)

二つの磐座をもつ神籬 ひともぎ

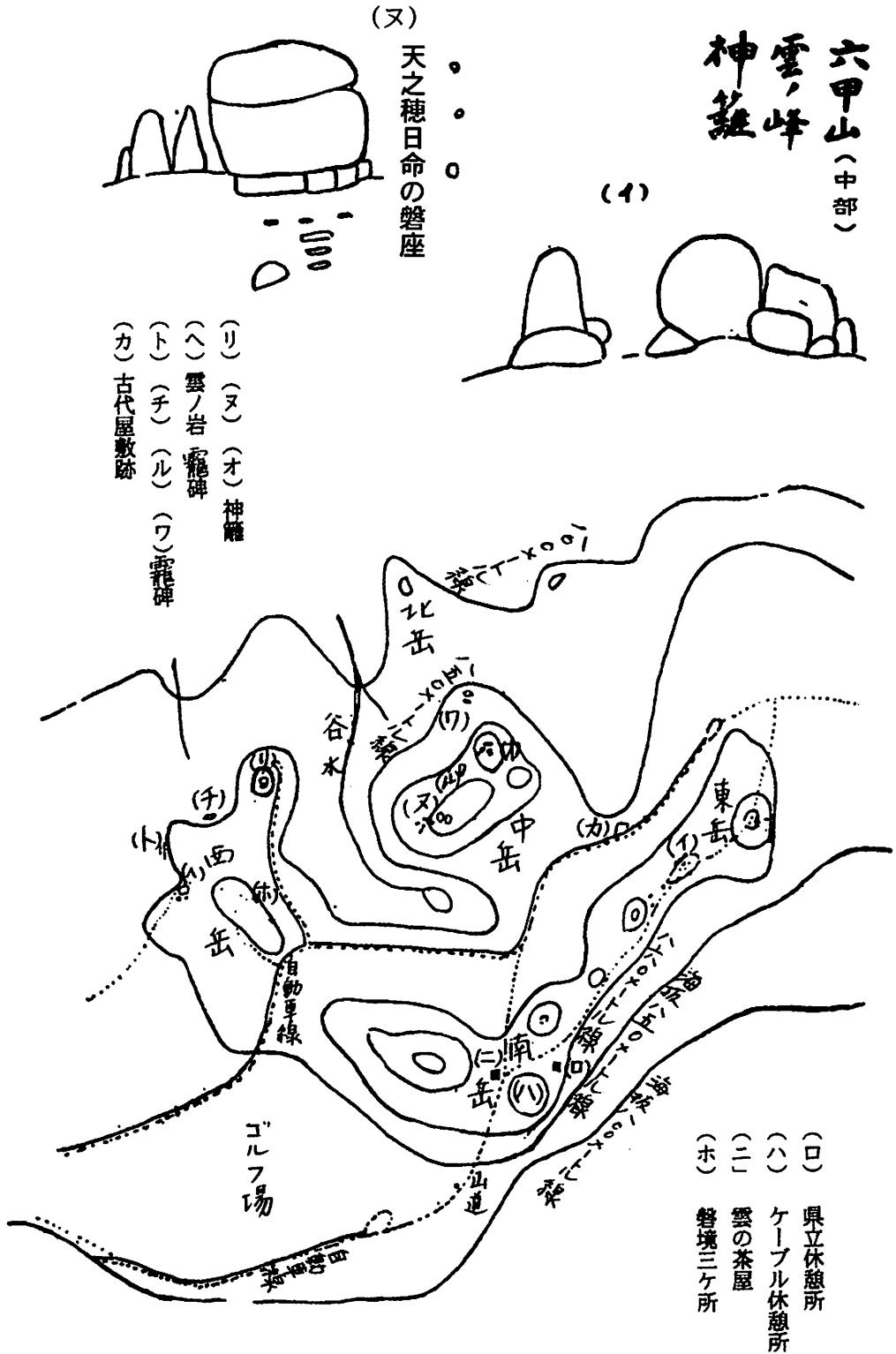
(三) 「六甲山・三国岩の磐座」

いつのころからか「六甲山は神の山」と囁やかれてきた。その根拠ははっきりしないが、その囁きが大声に変わったのは、阪神大震災の時だった。日本には古来、人知を越えた疫病の流行や天災の発生を人の世に対する神の警告とみる思想があった。為政者は早速、祭りを行い神意を伺って過ちを正したという。戦後、人間の便利の為とは言え六甲山を南北に縦断するトンネルを複数掘りさらに阪神間に新幹線を走らせるために巨大トンネルを東西に掘り進んで、六甲山の体内は文字通り縦横無尽に破壊され、山上には森林を伐採してゴルフ場をはじめ三〇〇をこえる会社の施設が立ち並ぶに至った。これでは神の山でなくても、山が怒るのは当然と言えよう。

では「神の山」とはどういう意味だろうか。「山が神」とか「山が御神体」とは良く聞く言葉である。たとえば奈良の

おおかみ大神神社は、後ろの三輪山を御神体とする信仰である。カイラス山を神と崇めて、その巡礼に命を賭けるインドとチベットの人々の列は絶えることがない。日本でも古くから神奈備山として尊ばれた山があった。後には山岳信仰となり、修験道が生まれた。

ところで、これらの山は、高く美しくまたは険しく厳しいが、その外観によってではなくそこには共通して古代縄文人の建てた神座すなわち磐座が存在するのである。三輪山をみると、古代に神の降臨を祈願した磐座がある。奥津磐座には大物主命、中津磐座には、大己貴命、辺津磐座には少彦名命の降臨された尊い磐座である。裏山には磐座があるから神社に本殿は要らない。大神神社にとって裏山の磐座が本殿なのである。その磐座に神が降りられるから、その山は「神の山」なのである。「御神体」と言う表現は、江戸時代以降のものである。ところで、磐座のある山は、「神の山」と呼ばれている山だけではない。日本全国の高く見晴らしの良い山や岬にも往々にして磐座の跡がみられる。



第14図 出典 荒深道斎「挙て磨け八咫鏡」第21図165頁

では六甲山には、どのくらい磐座があるのだろうか。

古事記研究者として磐座を踏査した荒深道斎翁は、その数の多さと壮大さに圧倒されて、六甲山は「まるで磐座の展覧場の如し」と発表し、昭和七年にこれらの保護を求めて、「六甲山神代遺跡保存会」の設立を提唱した。^① その趣意書を見ると、その時までに見つけられた磐座は、西六甲の三国岩と二つ岩、中岳の雲の岩と雲の峰の神籬、東山麓のこしき岩と麓麓荘町の古墳群、芦屋奥池の剣岩とその直下の鏡岩、甲山周辺の磐座など本稿(二)に紹介した大方を見つけれられていた。

ケーブルは既に敷かれていたとはいえ、当時は、山上の道なき道を和服姿に登山帽、ステッキで蜘蛛の巣を払いながら憑かれたように磐座求めて藪の中、林の中を探査する荒深翁とその弟子一行の姿が目に見えようである。

古典における六甲山の位置

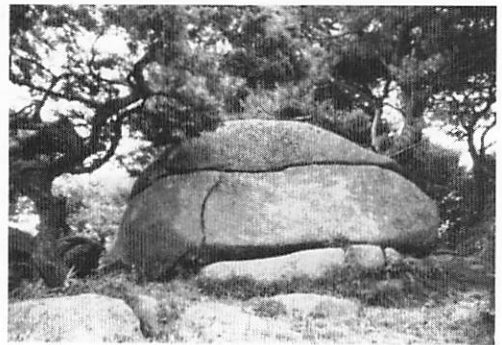
ところで、数多くの磐座のなかに、この山のもつ特別な意味を表示しているものがある。それは現在カントリーハウスの丘の上にある「天穂日の命」の磐座で、荒深翁の初期の論文には「中部六甲の雲の峰の神籬」とある。地主である阪神電鉄の話ではここに人工スキー場を作るときに岩を大幅に

動かし排除したということ

で、荒深翁のスケッチに比べると、現在の岩の数や配置は変わっているが、中心をなす磐座の堂々の威風は損なわれていないようだ。荒深翁の描かれた第一図は、この磐座を基点として半径五〇〇米の東西南北に磐境を建てて中垣とし、さらに四方一〇〇〇米ほどの所に外磐境(外垣)を置き、その外側には多種多様の磐境が置かれていたという壮大な神域であった。^②

では、何故、六甲山に天之穂日命の磐座があるのだろうか。古事記によれば、天之穂日命は、天孫降臨に先立って、地上の騒ぎを静めて人間の住める世にするために地上に遣わされた神である。

「豊葦原の中つ国に遣わせる天菩比神」^③ であってその降りられた所は、中つ国すなわち当時の日本本土の中央部で、それが丁度、六甲山に当たると言われている。奇しくも六甲山麓・芦屋市の芦屋神社には天之穂日命が主たるご祭神として祀られている。大阪の天満宮のご祭神でもあるが、里宮と



天之穂日命の磐座

しての芦屋神社の存在は、六甲山上の磐座との密接な関係を示すものとして注目に値する。

つまり六甲山は、後年、天孫邇邇芸乃命が降臨されたと云う「筑紫の日向の奇古御岳」と並び立つ「神の山」なのである。

ところで、この尊い神の山の何処に、中心をなす太陽崇拝の磐座はあるのだろうか？

三国岩の磐座

六甲山の生成を一瞥すると、この山は瀬戸内海に沿って西南から東北に延びた幅約八キロ長さ約一六キロの山並みで最初の隆起は西北神戸の高尾山から再度山までの低丘だったが、次に摩耶山、石南花山、西六甲山が隆起し、その後中央部の雲の峰周辺が盛り上がり、最後に東六甲の最高穂が噴火してその余力で高座山（黒岩山）や剣峰が噴火したのであった。

天之穂日命の磐座から旧六甲を目指して西進すると、やがて表六甲ドライブとの交差点「丁字ガ辻」に出る。ここで摩耶山へ向かう道路と別れて杉の木立の小道を奥へ数分行くと、右手にあつと驚く巨石建造物に出くわす。「三国岩」と

いう立て札があり、見上げると礎石の上に巨石が四個、上へ行くほど岩は巨大となり、最高の岩は特別に大きく圧巻で正面（南面）には全面にわたって小穴が空いていて、瀬戸内海の波に洗われた聖なる岩を運んだと言われている。高さ一〇米。その岩の頂上に登ると、岩は下で想像していたよりもはるかに大きく、横幅約五米、縦が約六米、そのうえ人工的な穴や線が彫られていて天文石の様相を示している。昔はこの岩の上から三国（菟原、矢田部、有馬の三郡）が見渡せたと云う。六甲山の名所の一つになっている。その巨大さは、東山麓の西宮市・越木岩神社の甕岩（こしき）に匹敵するが、これもその甕岩と同じく、神籬全体から見ると南座であり機能的には岩門である。またここには手力男命が降りられると言われている。

さて、岩門がこれ程に壮大なのだから、中の磐座（北座または奥座）は、如何ばかりか



三国岩の岩門

と奥へ進むと、昭和三年に建てられたという川西倉庫会社の邸宅に行き当たると、荒深翁の描写をみると

「終に川西別邸に入りて巨石群を発見した。既に数千年間神籬を忘れたる国民の不誠実のため顧みられず激雪豪雨のため原形を失せりと雖も、猶現時代の庭石の配置法を超越して太古の組方を遺せり」^④

荒深翁が初めて来られた日時は明らかではないが既に川西邸が建てられていて、磐座の荒れ果てた様子を慨嘆されている。しかしそこにはまだ巨石群が存在していたのである。ところが私が荒深翁の後継者である日立道根彦先生についてここを訪れたのは今から四十年前。その時には既に巨石群の姿は無く、川西邸の庭先の西北部の木立の奥に三石から成る磐座とその背後に残れる数石のみとなっていた。留守番夫妻の話では、家の建つ前には磐座の周辺には累々と岩が立ち連なっていたという。磐座は東に向かつて建てられているので、日没の時には、その背後に落ちる真つ赤な太陽の荘厳さに思わず我を忘れたものだった。夏至のころには太陽の位置によって三石の内の右前の岩に彫り物が浮き出した。神の顔とその下の神代文字。由緒書きのようなものだろうか。

二つの磐座

川西邸を挟んだ反対の東側には、少し高い所があつて草むらになつているが、清澄な雰囲気満ちていて、昔、磐座があつたのではないかと思われる。地図をみると、ここは旧六甲山の最高穂で海拔八〇二・五米。しかも、先の磐座とは真つ直ぐ東西の關係にある。私はふと国見岳の二つの磐座についての中西旭先生の言葉を思い出した。

二つの磐座が東西に相對峙しており、「東側の磐座は、わずかであるが高位であり、下界が眼下に全貌されると共に、風雪は直面まへもとに受ける状況にある。」

磐座の痕跡は無いので、大きさや形状を知ることができない。また今では周辺に杉や檜が林立していて、外界を展望することはできない。しかし此処が旧六甲の最高穂と云うことには特別の意味があるように思う。尊い磐座を古い山穂の最高穂に建てるという考えは理に叶っている。実際、日の出の時に此処に立つと、林立する木立の間から豊栄昇とよさかる朝日が眩しいまでに真つ直ぐここを照らす。一方、中西先生は、西磐座については、次のように書かれている。

「西磐座は、背後に灌木茂り、巨大石群もその頭部をだし、やや低位にあつて頂上のすべてを引き込む体制にある。」また西磐座の前には祭祀の場があることも指摘されている。

これを三国岩の西磐座に当てはめると、東のそれと大きさを比較することはできないが、低所にあり深く樹木に包囲されていて展望がきかず、その前に広い祭祀の場がある。(その祭祀の広場に川西邸が建てられたのである)

東磐座にはご祭神の荒ミタマ、西磐座には和ミタマが祀られ、両磐座の神気が相呼応して、またとないまでに尊い神座を形勢していたと考えられる。この二つの磐座のあり方は、天照大御神を祀った伊勢神宮の建築様式に引き継がれている。また岩門に手力男命が降りられるのもご祭神が天照大御神なることを示している。

九州のほぼ真ん中に位置し、もっとも古い地層である九州山地の主峰・国見岳の二つの磐座。南米大陸のほぼ中央に位置するマチュピチュ遺跡の老峰と若峰。六甲山の三国岩の二つの磐座。いずれも東西、または南北に相對峙する二つの磐座をもち、広地域における太



三国岩の西磐座
彫り物が太陽の位置によって現れる

陽崇拜の中心的神籬であると言えよう。三国岩の磐座は、阪神地区の中心か、近畿か関西の中心かについては、今後の調査を持たねばならない。

このあと川西邸はレストランとなり周囲の木立を切り倒した結果、磐座は丸裸となって見物に供されることとなった。嘆かわしいことである。巨大な岩門は観光の名所となっているので、よもや破壊されることはないと思うが、私有地の中にある磐座は、土地所有者に生殺与奪の権が握られているのである。

何とか、この貴重な文化財を本来の神域として復元・保護できないものであろうか。

三国岩の天文図

岩門の頂きに描かれた天文図が、どの星座を指しているのかについては、決め手がなくて長く判断に苦しんでいた。似てはいるが、北斗七星でもなくカシオペアでもない。ところが、ある時、三国岩の近くで働いている人が、恐ろしい岩があつて自分はその恐ろしさに耐えきれず、職場を変つたという話を聞いた。そこでその恐ろしき岩を訪ねて行くと、三国岩・岩門のちょうど道を隔てた南方に位置する大阪ガス会社の寮に出た。その広い庭を北に向かって奥に入つて行く

上の三つ星と言われている。北極星となる星たちの軌道で、周期を二万六〇〇〇年としている。現在の北極星は、小熊座のアルファ一星であるが、その対極には琴座のベガがあるので、今から一万三〇〇〇年後には、ベガが北極星になり、さらにその三〇〇〇年後には、白鳥座のデネフが北極星となる。縄文古代の指



三石から成る三国岩の西磐座

と、巨石が三石。良く見ると、それは琴座のベガと白鳥座のデネフそれにアルタイルを表現した岩だった。

目から鱗とはこのことだろう。やっと天文図の全貌が明らかとなった。この三石のうちアルタイルを除く二石は、歳差円^{さいさえん}上の星で、小熊座のアルファ一星を加えて、歳差円^{さいさえん}は、天の北極にあつて



三国岩の天文図

導者たちはこのことを知って

いて、どの星が北極星であつたかを岩に刻んで、磐座の建設の時期を書き残した。それを一つの岩に刻んでいる場合が多く、天文石と呼ばれている。しかし稀には神籬を構成する岩や岩群をもつて地上に大きく表示している場合がある。私の知る限りでは、九州

山地の主峰・国見岳だけで、この磐座が他に比類なく尊い祭場であることを示している。ちなみに、それは、北に北極星となる目ぼしい星はないが、小熊座のアルファ一星とベガが東と西に相對峙した時期を表示していた〔本稿(三)〕。

私の間違いは、三国岩の天文図を一つの天文石としか見ていなかった点にあつた。視野を広げて神籬全体を見渡さねばならなかったのだ。もちろん建設時のそれは現在の何倍も広く、南は先の三石を含んでいたに相違ない。

そこで何処にどのように歳差円が想定されていたか、また当時の北極星はどの星だったかを知るためには、先のベガとデネフの岩に加えて小熊座のアルファ一星の岩を見つけねば



三国岩天文図の示す北極星

ならない。それは、まずベガの対極にありしかも北方角にあるはず。それを辿ると、何と、天文図のある三国岩に到達した。

そこで三国岩へ戻って天文図を見直すと、確かにそれは小熊座で、小熊の尾の先には特別に大きな穴があり、これが当時の北極星であったことを示している。つまり三国岩の磐座が建てられたのは、現在と同じ小熊座のアルファ一星が北極星であった時期で、それは今から一回り昔すなわち二万六〇〇〇年前ということになる。

荒深翁は、周辺の他の磐座に比して、三国岩のそれは「余程古い」と言われていたが、その年数までは言及されていなかった。

二万六〇〇〇年前の北極星の穴は、正面（南面）を下から見上げると、一番上の巨大な磐の上部中心に大きく彫られていて、それは、まるで燦然と輝くばかりである。

参考文献

・荒深道斉「挙て磨け八咫鏡」弘報社発行

注①②④

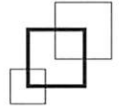
・倉野憲司校注「古事記」岩波書店

注③

・「道ひらき」発行「やたのかがみ」紙、129号

注①

・中山和敬著「大神神社」学生社



(六)

(四) 西宮市・^{かぶと}甲山とその森林公園の神籬

甲山森林公園にみる二つの石の文化

兵庫県西宮市の住人は、朝に夕に、小さいけれどお碗を伏せたように丸く美しい緑の山・甲山（標高三〇九米）を眺めて暮らしている。西に六甲山を控え、東は武庫川とその平野が東南へ向かって大きく開いた地形は、殊更朝日の豊栄昇り^{とよさかのぼ}りに清々しく、元旦には頂上から初日の出を拝もうとする人々

が毎年のように集まる。なかには前の夜からテントを張り、乾杯のワイングラスを用意する若者たちもいる。

甲山とはどういう山だろうか、そこには現代人の想像を越えた物語があるのだが、それはさておき、まず山麓を囲む森林公園を取り上げよう。



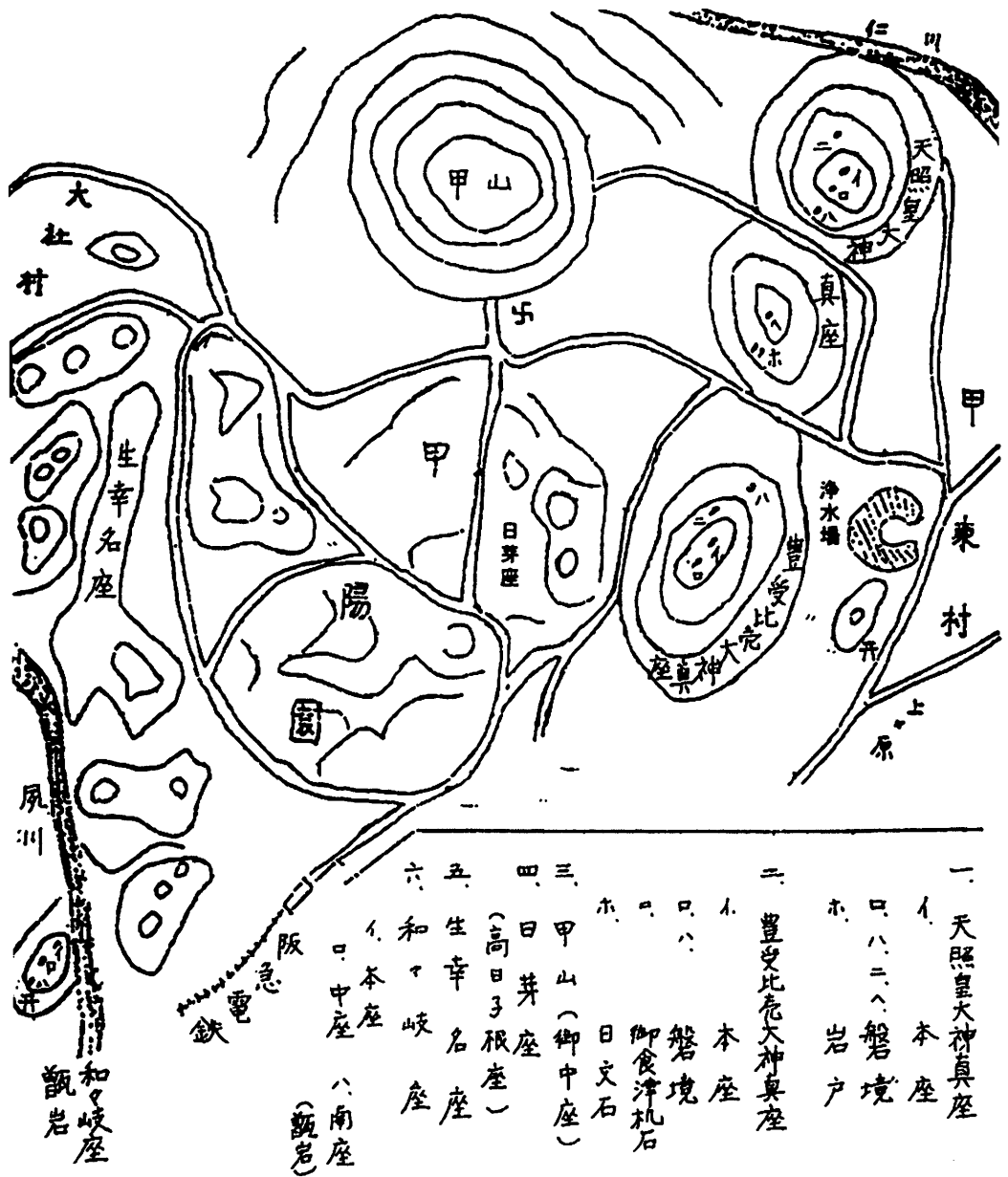
第1図 甲山とその東山麓の森林公園

この公園は、明治百年・兵庫百年を記念して昭和四五年に開園したもので、全域の九〇%が樹木で覆われた自然公園で、昭和五七年に來日したオーストラリアの造園設計の最高責任者ジョン・グレイをして「日本一」と言わせた公園である。^①

ところで、グレイ氏は気づいていなかっただろうが、この公園には時代の大きく隔たった二つの石の文化が混在している。一つは昭和四八年に地元の彫刻家十四名が三ヶ月をかけて創ったという大理石の彫刻群で、これは公園の中央に位置するシンボル・ゾーンを中心に配置されている。

もう一つの石の文化は、公園の全域に渡って至る所に存在しているが、周囲の景色に溶け込んで居るため気づかれにくい。非常に古いもので、その形状は現代人の目には人の手が加えられているとは見えない。が自然のままの岩石でもない。何となく人の暖かさを感じさせ、曲線的で丸く、大小連れ添ったり組み合わせたり、時には意味ありげに見え、鳥や動物のように見えるものもある。殆どが、樹木の陰にあっ

(六) 日本文化の源泉としての磐座・磐境



第2図 甲山森林公園内神籬の地図
 出典 やたのかがみ紙 第204号
 昭和64年8月1日号

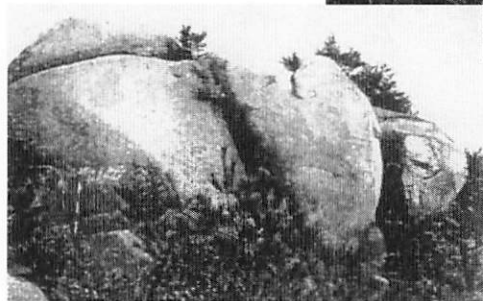
たり、草木に覆われていて自然の一部になっている。これらは、いつ頃のどのような文化であろうか。

磐座探査について、これまで度々紹介してきた古事記研究家・荒深道齊翁は、昭和十五年三月二十七日、数名の弟子を伴って、この地を探査されている。幸い、そのうちの一人で東京から駆けつけた太田三三氏は、この日の見聞を書き残している、その日記を次に紹介する。^②

太田三三氏の日記より

「……前略……明くれば、三月二十七日、今日は最後の日である。幸いなるかな、早朝より絶好の快晴、神跡探査にふさわしい日和である。神の恵みの厚きを感謝しつつ、九時（荒深）道主に御供して、まづ天照皇大神の荒御魂の鎮まります広田神社に参詣。それより甲東村上ヶ原の神社^③前にて撮影し、神戸水道浄水場を（東から左回りに）回り二丁余り過ぎたる所より左手の山腹を登る。径三・四尺ほどの大石無数にあり。（第6図）暫く眼下に仁川の流れを見る。頂点近くに巨石の聳えるのを見る。これ、上ヶ原にある天照皇大神の奥座である。実に堂々たるものにて、その形容の辞なし。（第3と4図）記念撮影の後、神籬上で少憩の後、二・

第3図
天照皇大神真座の奥座の全景



第4図
天照皇大神真座の本座（磐座）

三の磐境をみて岩戸座に至る。⑥ 実に巧みに積み上げた併立の岩戸座を見ては、故意にも自然山骨とは見なすことなし。

天照皇大神の真座の小丘を下り、又小丘を登るところに磐境あり。頂点に至れば、豊受大神の奥座ありて、西北の崖下に御食事机石ありて、北方座の内宮に対して外宮をなす。

この両座の間にある甲山南麓神呪寺に通ずる大師道を行きて左折豊受比売座北西方の谷間に降り、日文巨石を見て、ここで昼食の後神呪寺前より南数丁隔った所より左手の小丘に登る。三つほどの丘頂に神籬の立つを見る。相当の霊跡あるも、大いに穢されている。

これは、日芽座にて、大国主神世の待根座即ち阿雷清基高日子根之神、鳥成身神、言代産霊神の真座にて、建身名方神の真座は未だわからずなり。或は甲陽土地会社のために破壊せられたるならん。

この真座を見て後、山腹の大亀石頸尾約三十尺を見る。尻の方が大部分割り取られて哀れなり。

大阪築城に用ひんとして、毛利加藤等の各大名の紋を打った跡かすかに残れるを見る。

かくの如くして、関白の権威を以って築いた天下の大阪城も、神城の巨石を用ひし為に間もなく落城せしを思へば、現今の甲陽園苦楽園等住宅地のさびれし状を思ひ合わせて、神

威冒洗の靈罰の重きを考へさせられるのである。

これより西方の神籬群（生幸名座）を見んとして向ふも、時間なきため途中にて引き返し四時本部に帰す。

道主先生の御導き、真座の方々の御厚意を謝しつつ午後七時一路帰京の途に就く。

思へば、この三日間は近年にない快心の壮挙であり、次々に展開する大神籬の偉容に接しては、吾々は日立豊玉、秩父の山の端を尋ねて、大いに遠祖の御遺業の跡を究め、偉大な古代日本文化を宣揚せざるはずと誓霊するのであった。」

その後の踏査

驚いたことに、甲山の東山麓の小丘群には伊勢の皇大神宮の内宮と同じく、天照皇大神を祀った二つの小丘が、奥座と南座として南北に連なっており、更に道を隔てた南側の小丘には、外宮と同じく豊受大神を祀った神籬が存在しているという。この豊受大神の真座は、太田氏の図面では一座であるが、私の踏査では東は大きく西は小さく東西に二座ある。すなわち北の天照皇大神の真座は南北に二座あり、豊受大神の真座も東西に二座ある。ご祭神の荒御魂と和御魂を祀った二つの社殿が内宮と外宮それぞれに構築されている皇大神宮の建築様式と共通の原理がみられる。しかも年代的に言つて皇



第5図 天照皇大神真座の真砂岩

大神宮の方が、はるか後世の建築であることは、国見岳の磐座と同じで、古代から引き継がれしかも東西共通の祭祀様式がはるか昔から今日まで残存する事実は注目に値する。

第3図の写真は、天照皇大神真座の奥座を西から撮ったもので、昭和五十年代のものである。現在は、木が繁茂していて磐座を外から見ることはできないが、この写真では、その北部に真砂岩があり、この神座の中心を成す本座（磐座）も木々の間からその堂々たる姿を見せている。また本座の上には「神集いに集い神議りに議りたまう八百万の神たち」かと思える丸みのある美しい巨岩が累々と並ぶ広い岩の広場がある。(第6図)

豊受大神の真座の西の谷を渡って甲山の真南の道を南下すると、日芽座がある。日記の示す通り左手の小丘の上には大国主時代の神を象徴する三つの巨石がある。一般には、大国主神は一世一柱と思われているが、荒深翁によると六世あり、ここには、第六世大名貴神の三皇子

(阿雷清基高日根神、言代主神、鳥成身神) を象徴する岩がある。

さて、天照皇大神の真座から大国主の日芽座へと時代が下り、次は生幸名座となる。残念なこと、荒深一行は時間がなくて日芽座止まりとなり、生幸名座についての描写はない。分

からぬまま、試行錯誤をくりかえし、私なりに少し分かったこと、またこの地の中心を成す甲山については、次号へ回すが、その前に、二つばかり天照皇大神の真座について付加することがある。



第6図 天照皇大神真座の八百万の神の集い

あめ
やちまた
天の八衢

ひとつは、この真座の南座の頂上から少し南へ下がった西側に立つ奇怪な巨石のことである。それは、大きな尖った口を開き、目はらんらんと、大狸のようで狸でない、鳥のようで鳥でない、一見化け物のような大岩である。(第7図) どうしてこのような岩が神座に据えられているのだろうか、と周辺の掃除に通う度に疑問に思いつつ年月が経った。が、あ



第7図 一神あり その鼻七尺にして…

る時フトこの描写に似た文章が古典のなかにあることに気づいた。それは次の文である。

「二神あり。その鼻の長さ七尺余り。その背七尺余り。且つ

口尻くちかへ明り輝りて、眼八咫まなこの鏡かがみの如くにして、てり輝けること赤酸醬あかかぢに似たり」^⑤

これは、天孫降臨の途上に待ち構える怪しげな神についての一文で、お供の神々が怖がるなかを「女ながら面勝つ」だからと言う理由で天細女の神が選ばれて何者かを確かめに行くと、猿田彦と名乗り、天神の皇子が降臨されると聞いてお迎えにきたと言い、一行を無事に筑紫の日向の奇古御岳へ案内するという「天の八衡」における有名な出会いの物語である。

ところでここに、「天の八衡」が置かれているということ、この真座が天照皇大神の神座であることを証することにしろ。しかし、ただこの奇怪な巨石をもってのみ猿田彦神

とするには何か納得のゆかぬものを感じて、なお良く周辺を観察すると、この岩を見る角度に問題のあることが分かった。私はこの小丘を南から北へ頂上を目指して登るので、南向きである猿田彦の岩を正面から見ることになる。しかし私が通ったその山道は、昔の道ではなく最近つけられたもので、昔は麓から東へ回って登り、ちょうど猿田彦の左脇へ直角に出ることになることが分かった。その地点から猿田彦の岩を斜め後ろからみると、その姿は全く異なっていて、第8図が示すように、それは何と、老長けた尊い神の横顔である。これが猿田彦神の本姿であろう。ついで、その後方に長い黒髪を垂らした天細女の命の岩も見つけることが出来たのである。

私は急に元気になった。「天の八衡」があるのならば「天の岩戸開き」もあるはず、と。実は前々か



第8図 視角を変えれば尊き神の横顔なり

らそうではないかと思っていた場所があったが、決め手が揃わなくて迷っていた。それは、天照皇大神真座の奥座から一丘ほど西で、甲山に面した一角だった。ここも他所と同じように岩また岩が折り重り樹木や雑草に覆われ、いくつかの岩はすでに壊されていた。研究所の会員が何度となく通って雑草をぬぎ枯れ枝を除いて掃除をすると、全貌がやや明らかになった。この一角は多くの岩石を抱えた小さな広場になっていて、東側は不定型の岩が一行に立ち並んで壁のようになり、西は甲山に向かって開いている。その壁のように並んだ石の中央辺り頭上高く、まるでマッコウ鯨が海面から飛び上がったように、巨大な磐が一つ姿を現わし、辺り一面を制している。その磐座は、ずば抜けて大きく太く堂々としていて照り輝き非常に陽気で、思わず「太陽だ!」と叫びたくなる。その気持ちを抑えて、周囲をなお良く観察すると、一列に並んだ石群のなかには天手力男あめのたぢかぢの命と思われる一際大きい岩がある。その怪力で岩戸を開けたという天手力男の命である。では、その踊りで並居る神々を笑わせたという天細女の



第9図 磐屋から出られた天照大神の姿か

命の岩は何処だろう。一行に並んだ石の壁から一步離れたところに、変わった形の岩がある。ちょうど大神の真ん前。この岩は踊っているようにも見える。それにしても、天照大神が身を隠されたという岩屋や岩戸はどこにあるのだろう。例の磐座の後ろには、累々と岩が続いているが、どれも大神が身を隠されるほど大きくない。

ところが、この一角を何度も往復しているうちにフト気づいたのは、例の磐座の後ろに続く累々たる岩は、どれも薄い板状を成している、まるで堰を止めるかのように何枚も何枚もびっしり詰まっている。そこには、絶対に後戻りをさせないという固い決意を感じさせる。あ、これだ! これで良いのだ! 岩屋が無くとも、岩戸が無くとも、この固い決意が表明されておれば、それで十分なのだとな得した。そして、これらの神座を構築した縄文古代人の智恵と創意とその造形の美に、心からの拍手を送ったものだった。

注

①辰巳信哉著

「かくて緑は残った(甲山森林公園の歴史)」

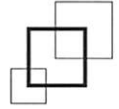
(財) 日本造園修景協会兵庫県支部発行

②太田三二の日記「在真御山座詣で」

やたのかがみ紙第204号(4) 昭和64年8月1日号

(六) 日本文化の源泉としての磐座・磐境

- ③ 現在の上ヶ原八幡神社(村社)
- ④ 残念ながら水道浄水場拡大のため破壊された
- ⑤ 荒深道斉著、日立道根彦編
「宇宙時代の科学的古事記正解」一九四頁に日本書紀および上記よりのこの引用がある。



(七)

甲山森林公園の磐座

生幸名座

甲山の東麓に広がる森林公園には、伊勢の皇大神宮の内宮と同じ天照皇大神を祀った磐座を中心とする祭場が南北に二丘、さらにその南には外宮と同じ豊受大神を祀った祭場が東西に二丘、さらにその西の日芽座ひめくらには須佐之男命すさのおのみこと(大国主)時代の三神注①を象徴する二磐座が配置されている。木造の神社建築か巨石による磐座かの違いはあるが、太陽崇拜時代の祭祀様式としては共通のものがある。

前稿に紹介した太田三三氏の日記には、次の探査地である生幸名座の手前で終わっているため、本稿の依拠する先人の研究は無い。

しかしその地理的範囲は、北山ダムから越木岩神社にいたる広い範囲に及び、目に映る岩も多種多様で思わず魅き込まれる神秘の地である。歴史の流れから見ても、次第に地球や人間の歴史的誕生に近づきつつあるかに思えて興味は尽きな

る。

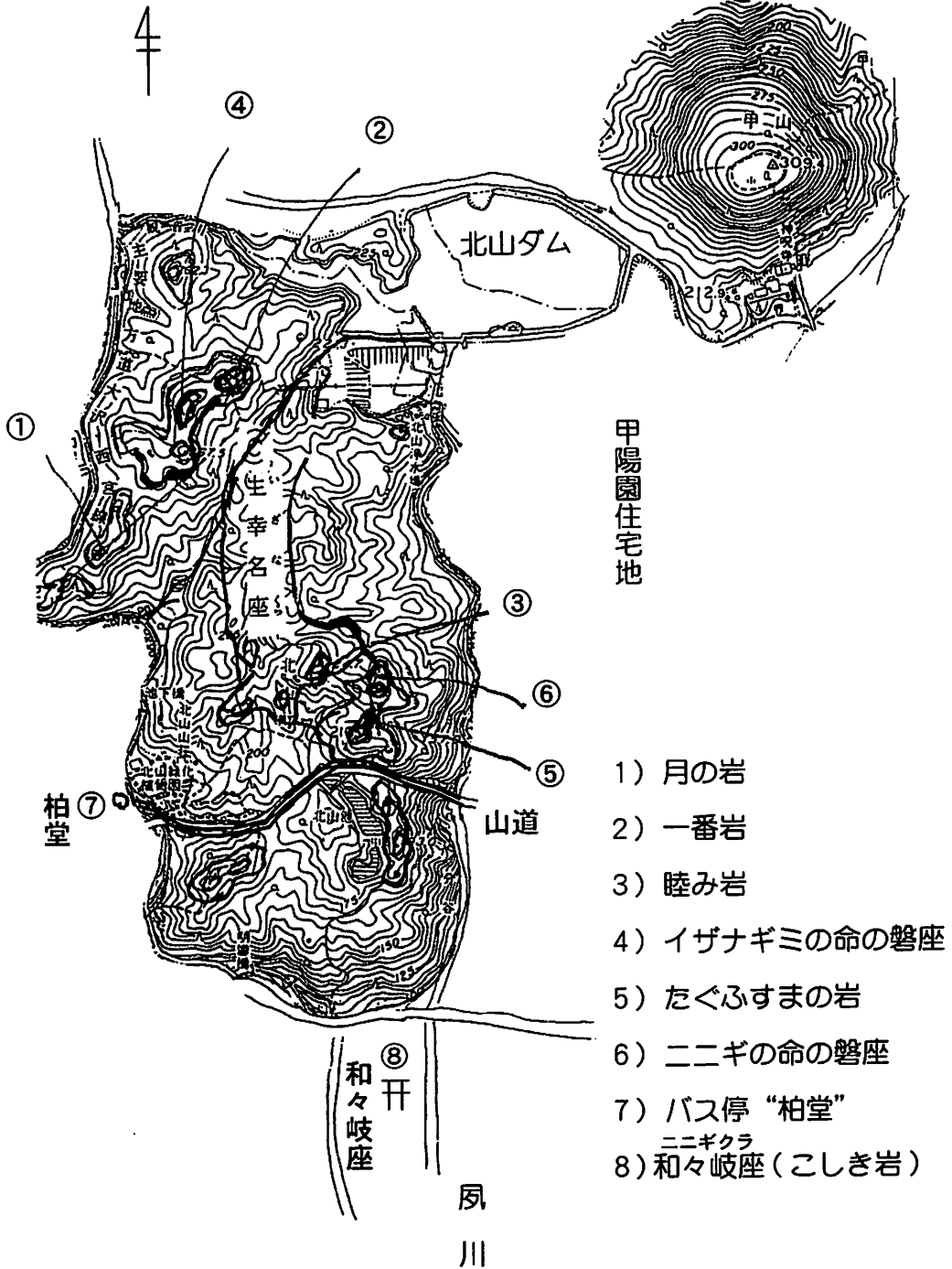
そこで分からぬまま、手探り目探りの探査が始まった。まず生幸名座の中央を真つ直ぐ南へ下がると、西に位置する柏堂かやんどうのバス停を東に向かって進む山道と交わる。その交差点は丘の上であり少し広くて累々たる岩に囲まれている。見晴らしが良いので、ここを拠点として周囲を観察することにした。まず目についたのは柏堂かやんどうから入ると左に見える大きな丸い美しい岩だった。それは満月のように輝くばかりに見えたので、《月の岩》(第一図)と名づけた。次に拠点から見渡すと、北へ伸びる真つ直ぐな道、これは北山ダムか



第一図 月の岩

生 幸 名 座

甲 山





第二図 一番岩

積まれた石組みが一つ堂々と聳えている。これは一番北で一番高いので《一番岩》と名づけた。(第二図)

この拠点は高台になっていてちょっとした広場のようだが、岩また岩が累々と立ち並んで磐のような感さもある。なかでも目につくのは、ほぼ中央辺りのところに抜きん出て美しい岩組みがある。五つの岩が左右対称に組まれていて、お互いに睦み合っているようなので《睦み岩》と名づけた。

(第三図)

少し前にこの辺一帯に火事があったとかで、この時期には「拠点」から見渡す限り、岩また岩で樹木が少なく、岩の配置を見渡すには又とない好機だった。しかし現在は木が伸びて一帯は樹林と化し岩は殆ど木の陰に隠れてしまった。

生幸名座の探査を始めたのは、私一人ではなかった。私の

ら入って南下した道でもあがるが、この祭場の背骨をなしていて参道のようなのであるが、その眞北に一段と高く

父や母もそれぞれに時間を見つけて通い、磐や岩の間を歩き回っては首をひねっていた。

磐座調査や古事記研究において、私は両親よりはるかに後進で、受け身だった。当時私は東京で桜美林大学の教職に在ったので、春休みや夏休みに帰郷する

と、待ち構えていた両親に磐座めぐりに連れ出され、古事記研究の熱風を浴びせられた。

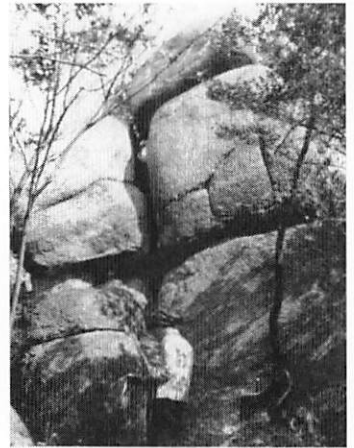
荒深先生の後継者日立道根彦先生が毎月西下され、私宅で荒深古事記を講義されていたのでお会いする事も多かった。磐座巡りは親孝行のつもりで付いて廻ったが、今から思えば、またとない幸運な時期だった。

ある時「生幸基幹命の磐座が見つかったよ」と母が大声挙げて戻ってきた。どれどれと父と三人で現地へ行くと、第四図の示すように高く堂々と組み上げられた岩組みが二柱寄り添うように立っている。そのようにも思える。しかし磐座の声を聞くような特殊な靈感を持ち合わせないわれわれ



第三図 睦み岩

三人には、確かにそ
うだという確認の根
拠が必要だった。た
だ母には、前に《風
神の岩》を見つけ
出した実績があつ
た。それは、芦屋市



第四図 イザナギミの命の磐座

奥池の《剣岩》について、これはオリオン座が刻まれており
武御雷之神（雷神）が降臨される磐座だと日立先生から教え
られた母は、近くに経津主之神《風の神》の磐座もあるはず
と確信し捜し回った結果、ついに道を隔てた五六五六岳の近
くに磐境に囲まれた磐座を見つけた。母の確信はこの二柱の
神を一对の被いの神とする古事記の思想に依拠していた。

西洋の天文学では、オリオン座は、天下無敵の勇者を示
す。しかし彼は蠍に殺されるので、東からさそり座が昇るこ
ろには、西の空へ沈んでしまふと言われている。ところが古
事記のなかではたとえば天ツ神の命を受けたこの二柱の神
は、力を合わせて天若日子を惑わした邪女を追い払う。雷の
すさまじい稲光と轟音、そして猛烈な暴風は邪女を海の彼方
へ吹き飛ばしてしまったと言われている。

神社建築時代になつてもこの二柱の神の御社は対として並

び立つ。茨城県の鹿島・香取神社がその良い例である。深く
蔽しい原始林を背景にして建つ鹿島神宮は建御雷之神を祀
り、北向きだが中の磐座は東（太平洋）向きと聞いている。
一駅離れた香取神社は、参道から御社全体が桜の木に覆われ
ていて、春にはそよ風に乗って桜の花吹雪が御社を渦巻く。
雷と風、それぞれの個性が見事に生かされた御社である。

ところで、磐座探査で行きづまった時は古典に戻らなくて
はならないというのが、これまでの私の経験だった。早速帰
宅して古事記を繙といた。黄泉から戻られた生幸名基の命が
筑紫の日向の立花で身添気被いなしませるとき成りませる
神々の中の三貴神の誕生について古事記に左の記述がある。

ここに左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、
天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の
名は、月讀命。次に御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名
は、建速須佐之男命^{注②}

早速、森林公園に戻り生幸基幹命の磐座の前に立つ。その
左の御目の先を見通すと、何と、そこには《一番岩》が聳え
立っているではないか。《一番岩》はこの神籬の中心を南北
に走る参道の正面真北に聳える最も高い岩組みである。古事

記によると、これが天照大神の磐座である。また生幸基幹命の命の磐座の右の御目の先には、何とあの美しい《月の岩》がある。古事記によると、これは月読之命の磐座である。御鼻の前には須佐之男の命の磐座があるはずだが、ここは樹木が繁茂して全姿をみることはできないが、木々の間から垣間見る頂上の岩から判断して相当大きな磐座と思われる。

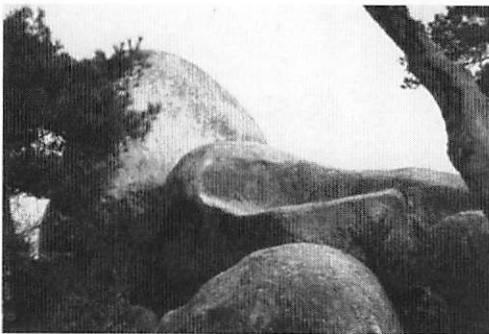
かくして、三貴神の磐座の存在とその位置関係から母が見つけた生幸基幹命の磐座は正しいことが分かった。

次に、参道を南に下がると先述の通り柏堂のバス停から植物園を抜けて東へのびる山道との交差点、私の呼ぶ「拠点」へ出る。拠点は四米ほどの高さに有り、上は十メートル四方位で磐のように巨石が累々と連なっている。その中央当たり美しい岩組みの《睦み岩》が存在する《一番岩》から南下するにしたがって、次第に地球と人間の誕生へ近づくのではないかと胸を時めかしつつ、なお良く観察すると、拠点の南東部に一際大きな楕円形の岩がある。登山クラブの人達はこれをポールド・ヘッド（禿げ頭）と名付けて岩をよじ登る練習をするために四角い金具を頂上へ向けて幾つも打ち込んでいる。その岩の横に長い流線形の岩が横たわっている。中央が長く掘られたようにへっこんでいる。ドルメンや磐舟ではない。古事記の中に、流線形をなし柔らかくなだらからか

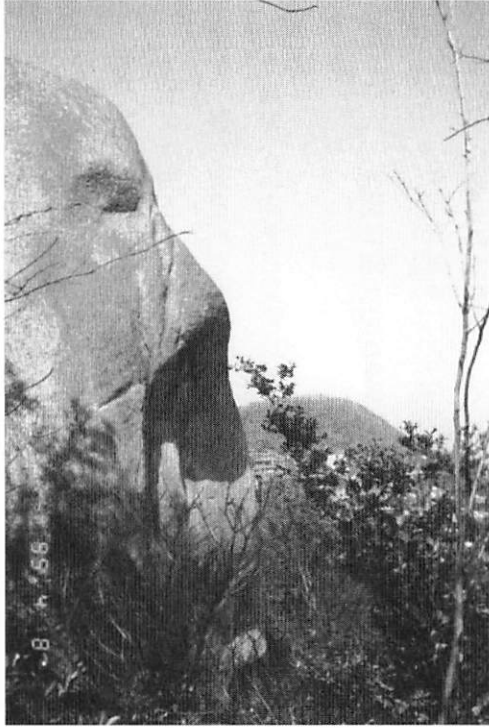
かを包むようなものが出てこないだろうか。

ふと思いつくのが《たぐふすま》であった。古事記によると天照大神の長皇子・天忍穗耳命が今や生まれ出づる人間の尊きみ魂の祖として地上に降臨せんとなされし時、妃・万幡豊秋津靈芽命に皇子が誕生。代りにこの皇子を降臨させようということになり、皇子の御床を《たぐふすま》に包み天之兒弥根日子の命に背負わせて天降りましたという。注③その《たぐふすま》ではないだろうか。そうとすれば近くに天孫和々岐命の磐座があるはず。《たぐふすま》の東には例のポールドヘッドと呼ばれる巨石があった。この磐は、ある研究者が太陽石と呼んだほど大きく豊かで貫禄に富んでいる。注④しかしどうみても後ろ姿のように思える。この磐の向こうの面はどうなっているのだろうか。しかし誰もそれを見ない。なぜなら、この磐は絶壁の上に立っただけで危険を侵さずに見ることは難しいからだ。

私は必死になって木の枝を押し分けてやっとその磐の横



第五図 たぐふすまの岩



第六図 ニニギの命の磐座

顔をみる事ができた。何と、その磐には目があり、鼻があり、しかも東南の方向へ向つて大きな口を開けて雄叫びを挙げている尊い神のお顔だった。これが和々岐の命の磐座なのだ。

是に天津忍穂根真身命天降りまさん装ひを為しませるひまに、皇妃高基神の女万幡豊明津靈芽命皇子生みませり。天照皇大御神、高基産靈神共に甚と愛ぐしとして育てませり。故に此皇子を国邇岐志邇々気命として、其御父命に代わりて天降りますへく神議りまして真床を袴袂覆ひ、天之児弥根幸靈凝命に負はし、太魂命靈璽を抱きて天降しませり。注⑤

ところで、ここまで来れば、私が「拠点」と呼ぶ場所が何を意味するかは明らかとなろう。和々岐命の降臨の地に違いない。それは広く「大八州」なのか、それとも狭く「筑紫」だけなのか。累々と立ち並ぶ磐岩を詳細に調べる時間が私にはなかった。ただ九州が見事に表現されていることに感激した。あの「睦み岩」(第三図)だ。

古事記によれば、生幸名基・生幸名幹の命が天より戻られて、天授の身止の方法によって再び島生みのみ業が進められる。最初に淡路島を生み給い、その響きは西へ及んで四国を生み給い、更なる西進の響きによって九州を生み給う。九州の生成について古事記は次のように述べている。

次に筑紫島を生みき。この島もまた、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。故、筑紫國は白日別と謂ひ、豊國は豊日別と謂ひ、肥國は建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊曾國は建日別と謂ふ。次に伊伎島を生みき。亦の名は天比登都柱と謂ふ。次に津島を生みき。亦の名は天之狹手依比賣と謂ふ。注⑥

ここでは九州は面四つとなっているが、「睦み岩」はどう

見ても五つの岩から構築されているように見える。他の古典を調べて見ると、上記には次の記述がある。

上記には面五つあり、面毎に名あり、故筑紫を白日別と謂ひ、豊を豊日別と謂ひ、肥を建日別と謂ひ、隈岨を速日別と謂ひ、日向を日豊奇比根別と謂ふとあります。注の

ここでは、九州は面五つとなっている。

では、和々岐命が着地された筑紫の日向の「くしふるみたけ」は何処にあるのだろう。「くしふる」は色々な漢字が当てはめられている。久士布流多気、または奇触峰または穂触峰等。しかし荒深式に漢字を排除して元の日本語に戻して読むと、「くし」は「奇」すなわち不可知に神秘または稀有に尊い。「ふる」は「古い」つまり「稀有に尊く最古の高山」ということになる。そこで「鳥生み」の記述を読みなおすと、島の爆発力が西へ響くのは、地球が東へ向って回転しているからで、最初の響きは最古の地層と成って、四国を貫き九州の中部を斜めに横断している古生層で、九州山地と呼ばれている。その最も古い九州山地の主峰といわれる高い山(高千穂)は国見岳で、地元では大國見岳・小國見岳と呼ばれた二上山をなしている。熊本・宮崎の両県の県境にあ

り、その頂上はなだらかな円頂峰で、その上に築かれた高さ七米の神籬の上に山岳型の磐座が二つ東西に相對峙している。尊い斎場である。高千穂とは固有名詞ではなく、高い地穂すなわち高い山のこと、筑紫の日向と限定された地域の高千穂といえ、国見岳でもある。この山は海拔一、七三九米で九州では三番目に高い山で、まことに稀有に尊く古い「くしふる」御岳である。実は「陸み岩」の前に重なるように丸いきれいな岩が配置されている。これが「くしふるみたけ」ではないだろうか。

付記

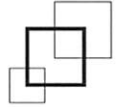
以上は、生幸名座の「拠点」から北の部分、すなわち上半分の探査にすぎない、拠点から南の下半分にも様々な磐座や岩組みがあつてその説明が急がれるが、いまだ手付かずのままである。誰か良く探査されんことを切望する。次稿は、次なる和々岐座(こしき岩真座)について述べ、次いで甲山と全体のまとめ、最後に「磐座の破壊と修復、保存」について私見を述べたいと思う。

(注)

(1) 阿雷清基高日子根之神、鳥成身之神、言代産靈之神の三磐座

(七) 日本文化の源泉としての磐座・磐境

- (2) 出典 倉野憲司校注「古事記」岩波書店
- (3) 出典 荒深道斉筆録「忍日伝天孫記」弘報社
- (4) 大槻正温・柳本翠耕ら「北山に『古代の天文台』」毎日新聞（一九七八年九月十二日）
- (5) (6) 出典 倉野憲司校注「古事記」岩波書店
- (7) 出典 荒深道斉先生著、日立道根彦編集「宇宙時代の科学的古事記正解」道ひらき東京出版部発行
- (8) 「兵庫神祇」第五七〇号の国見岳に関する拙稿を参照されたい。



(八)

甲山とその森林公園の神籬

和和岐座

甲山山麓の南南西に位置する北山ダム、その西側に南北に長く横たわる丘陵は生幸名座と言つて、生幸名岐・生幸名美命の磐座を軸としてその皇子である天照皇大神、須佐之男命、月読命の三貴神の三つの磐座が古事記の記述の通りの位置に配置されているのを前回紹介した。また生幸名座の中央の道を南下して柏堂のバス停から東へ伸びる山道との交差点まで来ると、一段と高くなり、砦のような巨石群があり、そこには天孫降臨を示す岩組みが揃っている。なかでも天孫和岐岐命を象徴したと思われる巨石は特別大きく貫禄があるのだ。これまでも幾人かの研究者がその後姿をみて太陽石として紹介しているが、神籬全体の構想から見直し古事記の記述を参照すれば、自ら明らかとならう。

さて、生幸名座の先はどうなるのだろうか。太田二三氏の残した地図（P. 58）によると、^{註①}、生幸名座の南端の先には

「和和岐座」が描かれ、小さいながらも北から本座、中座、南座と三組みの磐座が存在したことが伺える。昔はこの辺一帯は人里から離れた甲山山麓の山上に位置していたと思われるが、今は周囲に住宅や学校がびっしりと建て込み、坂の上の神社なる感である。現在、上記の地図の南座の前には越木岩神社が建っている。その鳥居をくぐり神社の正面から北上しながら磐座を探すと、まず出喰わすのは、神社の真後ろにある巨石である。その高さ十米は、六甲山の三国岩の岩門や剣岩の高さを越えるものではないが、周囲が三十米もある。神社はその巨大さを尊び「霊岩こしき岩」と称して前面に祠を建てて神仕えをしている。由緒書きによると、大阪城築城の折りにこれを切り出そうとしたと



第2図 和々岐座の岩門の正面

ころ忽ち岩中より鷄鳴し白煙立ち上り、その靈気に打たれて石工たちは転げ落ちたとのことである。その巨大さは人々に畏敬の念を起こさせるためか神社参拝の後ここまで足を延ばす人は多い。しかしこの巨石は、神籬全体の構造からみると辺津へつであり南座であり、機能的には、岩門いわとである。



第3図 本座の天つ神を象徴する巨岩
左端の岩は三皇女を表す

その岩門の背後に続く鬱蒼たる林の中の小道を登ってゆくと、やがて左手に翼を広げたような二群れの岩組みが姿を表す。その先は風雨に曝され落ち葉の積る原野となる。その頂上に最も尊き磐座が、ひっそりと佇む。一六〇センチ四方の礎石の上に組まれた七個の岩は人型のように見える。荒深翁によると、正面中央に一段と高く組まれた岩は天照皇大御神で、その周囲を五柱の皇子みこを象徴する五個の岩と三皇女ひめを象徴する一つの岩が取り巻く。すなわち正面左は第一皇子・忍穂根耳おしほねみみの命のみこと、右には第二皇子・天之穂日あめのほひの命のみことの岩が並び立つ。さらにこの岩組みの前方に、翼のように左右に広がる二

つの岩群れは、先ほど左手に見ながら登ってきたのであるが、天孫和岐の命を象徴し、この奥座に古事記に書かれている三代にわたる天つ神が祀られていると言う。

ところで磐座は、木材による神社建築の始まるはるか以前に古代人が巨石をもって構築した自然・太陽崇拜の斎場であるが、木造の社殿が作られるようになると、人々はまず磐座の前に小さな社を置き弊殿とし、それはやがて山麓に下宮を建て、さらに時代を経て人々の便利主義が高まると、住居地の近くに里宮を建てることになった。その結果、現在10万社といわれる神社の大方は元宮もとみやである山上の磐座との繋がりが切れてしまった場合が多いが、越木岩神社は、その双方を境内にもつという点で稀有の存在である。

現在「こしき」は「越木」または「甑ししき」と書かれているが、いづれも当て字で、磐座の建てられた大昔には、元の日本語で、「こ」は心で、「し」は霊ひに通じて神、「き」は現れることを意味し、総じて「神の心の現れる」尊い斎場であった。また後世になって「こしき」は「児敷き」に通じるところから子孫繁栄の神社として広範な参詣者を集めていた。ところで、本座と南座（岩門）の間には中座があったことが地図は示している。そこには天孫降臨時の同伴神ともがみを表す磐境があったということだが今はすべて失われている。また

荒深翁によると、この岩門に降臨される神は、須佐之男命すさのをのみことということである。神社はこの巨石を米を蒸す蒸し器の形だと説明する。そこで改めて東南角から岩門の巨石を見直すと、蒸し器どころか、まず目につくのは岩門の足元に長々と横たわる大蛇おろちの姿である。(第4図) さらにその上の石に目をやると、そこには馬のような牛のような長い動物の顔が見えるし、さらにその奥には獅子のような兎のような猿のような顔も見える。これは何としたことだろうか。そこで巨大な岩門を持つ六甲山の三国岩を思い出し比較してみた。彼の地のご祭神も天照皇大神である。しかし岩門に降臨される神は手力男命たぢからのおとこである。同じご祭神なのに何故違うのだろうか。手力男の命が天照皇大神の第一のお伴神であることは、伊勢の皇大神宮の内宮にも示されている。



第4図 東南角から見た岩門

こしき岩の岩門にはなぜ手力男之命でなくて、須佐之男命が降臨されるか。それは、こしき岩の奥座には、天照皇大神のみならず三代の天つ神が祀られていることに関係があるようである。

まず考えられることは、本座に祀られている第二代目の天つ神である五柱の皇子と三柱の皇女は、天照皇大神と須佐之男命の宇気比うけひ(誓い)の合力によって生み出された神々であるということである。従って生みの親神である須佐之男命を祀る磐座がここに存在する十分の理由がある。しかし分からないのは、その磐座に何故多数の動物の姿が表示されているのかである。

そこで、須佐之男命について詳しく知るために古事記を繙き、漢字を排除して、元の日本語でスサノオの意味を探ると、スとは生命の元もと、サは榮え殖やす。ノは延び広がる力、ヲは緒で、総じて「生命の素もとが幸さきち榮える力」となる。

ところで須佐之男命のご任務はどのようなものだろうか。三貴神のご発祥と分治について古事記は次のように記述している。

「この時伊邪那伎命いた大いたく歡喜よろこばして詔のりたまひし『吾は子を生み生みて、生みの終はてに三はしらの貴き子を得つ』とのりたまひて、すなわち天照大神には『高天原を知らせ』と、次

に月読命に詔りたまわく『汝命は、夜の食国（おつくくに）を知らせ』次に建速須佐之男命に詔りたまわく『汝命は海原（うみはら）を知らせ』と事依さしき」^{註②}

ここで注意すべきは、古事記の編纂者が漢字を導入したことが、後世大きな誤解を残したことである。すなわちその任務「うみはら」を「海原」と当て字したことで、海を治める任務を負ったがごとく誤解されるようになったが元の日本語の意味によると「うみ」は「生み」で、「うみはら」は海原ではなく、「生み腹」である。それは、海ばかりでなく、万物を生み出すべき所すなわち地上の一切の生命を司ることで、須佐之男命はその名の意味からも「生命の素（もと）を生み幸ち栄える神」である。

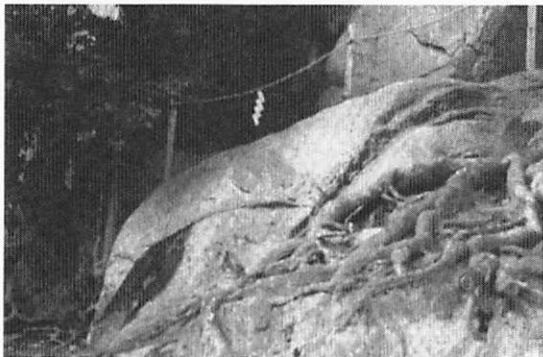
既に地上生命は、伊邪那伎命時代に火山活動によって四方へ蒔き散らされていた蛭子（むすこ）（バクテリア）がアメーバー細胞組織に進化していたが、次の穂之狭分命時代（ほのさわけのみこと）に蘚苔時代へ進化していた。それを更に草木時代へ進め（須佐之男命）次いで虫魚時代へ進め（速須佐之男命）次に鳥獸時代へ進める（建速須佐之男命）こととなるのである。

つまり天つ神三代の御世とは、地殻の大変動とその上に生きる生命の革新・造化・変化・発展を経過してやがて人間の誕生へ向かう長い長い進化の御世で、須佐之男命は、大国主

命に世を譲られるまでの波瀾にとんだ至難の世を治められた神であった。その神業を讃えて、進化途上にあつた動物たちの姿をここに表示したと考えられるのである。

その眼で岩門を見直すと、その足元に長々と横たわる大蛇は、疑いもなく八俣の大蛇である。須佐之男命が大蛇を退治し、足名椎、手名椎を助けられたことは、それまで繁栄していた爬虫類の時代に終焉を打ち、鳥獸時代への開幕を告げるものであるがこの物語は古典にあまりにも有名である。

ところで岩門に顔が見える大蛇以外の動物について古典はどのように記述しているであろうか。古事記では天上でのご乱行によって八百万の神々に追われ空腹のまま地上へ戻られた須佐之男命は大気津比売神から食物を与えられるが、その食物は大気津比売神の口や鼻や尻から取り出した物と知って怒り殺してしまふ。しかし死した大気津比売神の体から多種の食物の種が生まれた。その頭に蚕、目に稲の種、耳



第5図 岩門の足元に横たわる八俣の大蛇

に粟、鼻に小豆、陰に麦、尻に大豆……と。ここでは蚕以外は植物である。

これにたいして、日本書紀では少し違っていて、もともと須佐之男命は天照大御神の命をうけて保食神うけもちのかみに会うため地上に降り立ち山海の馳走を受けられる。しかし口から取り出した食物であったため怒って殺してしまう。これを聞いた天照大御神は大層怒り、他の神の様子を見に遣わしたところ、死者る保食神の「頂うぶから牛馬うま化れり」、額の上に粟、眉の上まゆの上に蚕、眼の中に稗、腹の中に稻、陰に麦、大豆、小豆が生まれた。と書かれている。註⑤

まとめ

和和岐座（越木岩神社の磐座齋場）は、この森林公園の磐座全体をひとつに集約した尊い齋場と考えられる。扇の要かまのような存在と思う。

私は、こしき岩の岩門の意味を探ることによって、磐座に籠められた構築者のすなわち縄文古代人の深い思いを垣間見ることができた。物質文明の中で育ったわれわれ現代人は、磐座をみて、まずその大きさに心を打たれる。そしてその次にはこの巨石を山上までどのような方法で運んだかと運搬を気使う。そしてどちらも現代人にはできないことを知りそこ

で初めて古代人にたいする認識を新たにする。大きさにして運搬の方法にしてもどちらも極めて物質的表面的な見方である。それに対して、磐座が何を表示しているかというところ、縄文人が磐座の磐を選ぶにあたっての配慮は、それがそこに降臨される神に相応しく聖なる磐であるか否かだけではなく、その神のご性格やご任務、業績かみわざに相応しく形を整えているか否かでもあって、これを全う出来る者は、単に石工に勝れているのみならず相当に博学な者である。それに比べて、われわれ現代人は磐座の前に立ちながら何と、殆ど何も知らず気も付かず、感じもせず、哀れな人間であることよと情けない思いをする。しかし気づいたことは再出発の鍵となる。岩門について更なる観察を進めたいところであるが、残念ながらそれができない。岩門は、身の丈を越える大きな雑木で覆われていて人が近づくとさえない。まるで雑草のなかに放置されているようだ。ただ一本の雑草さえ許さなかった縄文人と比べて、何という不精ぶじょう、何という無知、何という不敬であろうか。

ところで三章(六)・(七)・(八)にわたって取り上げてきた甲山周辺の磐座群は、すべて甲山に向かって配置されている。一体甲山とは何であろうか。ただの自然の山なのだろうか。

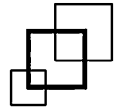
それとも人工の加わった山なのか。今回はこの問題に迫りたいと思う。

註

- ①太田三三の日記「在真御山座詣で」
やたのかがみ紙第204号(4)
- ②倉野憲司校註「古事記」岩波文庫31頁
- ③荒深道斉著、日立道根彦編
「宇宙時代の科学的古事記正解」111頁

編集者註

この「日本文化の源泉としての磐座・磐境」は、この八回を「兵庫神祇」に掲載した後、中島氏の逝去により未完となりました。



阪神地区の代表的な磐座

NPO法人 古代遺跡研究所

西宮・越木岩神社 祭祀遺跡の巨石群

所長 和田 憲一

もの数え方は、いろいろあります。

「二匹」「一頭」「一個」「一本」「一杯」「一羽」などなど。

・・そして、山の数え方は、「一座」、「二座」。

しかしなぜ「座」という言葉をつかうのでしょうか。

それは山の頂上には 神様が鎮座すると考えられているからです。

そこで、磐座とは 神様がお座りになる岩ということになります。それだけ磐座は 神様が降臨する尊い依り代なのです。

その代表的な事例として巨大な磐座で有名な越木岩神社をご紹介します。

越木岩神社は東六甲山麓 唯一の霊場で、天然記念物の森におおわれた霊験あらたかな神社として人々の信仰を集めています。

「こしき」は「越木」または「甑」と書かれています。が、いずれも当て字で、漢字のなかった昔には「こ」は 神の

心、「し」は、霊(ひ)に通じて神、「き」は現れることを意味し、総じて「神の心の現れる」ことを意味したと思われる。

また「こしき」は、「子敷く」に通じるところから子孫繁栄の神として 広範囲な参詣者を集めています。

西宮市甑(こしき)町の「越木岩神社」の境内には、巨石によって構築された祭祀遺跡が、累々と立ち並んでいます。摂津名所絵図や摂津史によると「甑岩神祠は甑岩村にあり祭神巨岩にして倚疊甑(きるいこしき)の如し、此地の産土神(うぶなすがみ)とす」と記してあり、霊験あらたかな霊岩とされてきました。

甑岩は、上部が中央から2つに割れて、その頂上から樹木が生えている。これを陰石(女性器石)とし、女性守護の神・巖島神社が祀られています。

これらの岩は、磐座または岩境と呼ばれるもので、まず本殿の背後に聳える巨石は、高さ十メートル、周囲三十メートル

ルの巨大なもの。(これが南座にあたります)

神社はこの岩を「靈岩・こしき岩」と呼び、古代信仰の中心としていますが、その昔、この巨石を大阪城築城のためにこれを切り出そうとしたところ、たちまち岩中より鷄鳴し白雲立ち上り、その靈氣に打たれて石工たちは転げ落ち倒れ伏したと書かれています。

その巨大さは人々に畏敬の念を起こさせるためか、神社参拝の後に、この巨石まで足を延ばす人は多いようです。

しかしこれは遺跡全体から見ると 南座に過ぎず、機能的には岩門なのです。

越木岩の 岩門の背後に続く昼なお暗き鬱蒼たる林の中の小道を北へ50メートル登っていくと、やがて左に翼を広げたような二群れの石組が姿を現します。(これが中座になります)

その先をなお北へ30メートル 進むと、その頂上に、最も尊い磐座が人知れずひっそりと佇んでいます。(これが奥座Ⅱ北座です)

160センチ四方の礎石の上に組み込まれた7個の岩は人型のように見えます。

この奥座については、神社の掲示板には

「稚日女尊(わかひるめ)は、伊勢神宮内宮にお祀りされ

る天照御大神の和魂(にぎみたま)あるいは妹神と伝えられ、稚く、みずみずしい日の女神様であり、物を産み育て万物の成長を加護する神様としてご崇敬を集めています。」とあります。

一方 磐座の研究家 荒深道斎(1870年～1949年)によると、この奥座こそ最も尊い磐座で 太陽神(天照皇大御神)であると記しています。

ところで磐座とは、木材による神社建築が始まるはるか以前の旧石器時代に、古代人が巨石をもって築いた自然(太陽)崇拝の祭場のことで、外国ではメンヒル(立石)と呼び、ドルメン(机石)やストーン・サークルと共に、大切に保存されている。英国のストーン・ヘンジも同じ流れを継ぐものです。

山の多い日本では、磐座の多くは山上に作られました。古代人はマイ・ホームやマイ・マネーなどの私有財産の繁栄祈願のために神参りをしたのではありません。

地上のあらゆる生物に自然の恵みが豊かであるよう祈願し、神に対する真心のあかしとして遠方から聖なる岩を運び、磐座を構築したのです。

しかし 後世になって社殿が作られるようになると、山麓に下宮を作り、住居地の近くに里宮を作って、次第に、元宮

としての山上の磐座を忘れてしまいました。つまり祈りの対象は、時代が下るにつれて

●山上の磐座 である元宮、から●山麓の下宮へ。そして●住まいの近くの里宮 へと、

神社（の建物）が 人間のほうに近づいてきたのです。つまりお参りに行くのも効率化がはかられ便利になったのですが、これが 現在の神社の一般的な形態です。

こうして 里宮の神社をお参りすることで、元の元宮である磐座の存在は次第に忘れ去られてしまい、現代ではその磐座の意味すら、

「磐座ってなんだっけ？」と、忘却の彼方のものとなり果ててしまっている現状です。

ただ、中には、奈良の大神神社のように、磐座と社殿が隣接している所では、磐座のある三輪山そのものを本殿として、神社建築としては（建物としての本殿は無く）拝殿のみを置くところもあるのですが、この点において、越木岩神社は、磐座と神社建築が同一境内にあるという数少ない 非常に貴重な文化遺産といえるのです。

私たちは、遠方から聖なる重い岩を運び上げて、磐座を造った古代人の偉業をたたえ、その世界観を学ぶ謙虚さを

もって、古代遺跡を守るという現代人の責任を果たしていきたいものです。

なお、この神社の境内から道路を隔てた北の延長線上に標高約200mの北山があり、山中に巨石・磐座群があります。これら磐座を奈良県・三輪山の磐座と比較し、全体的な配置構成が似ているとする説もあります。

特に私たちが強調したい点は、これらの磐座が、開発の名のもとに破壊されては、二度と元に戻すことは不可能だということことです。

この貴重な文化財を 後世に引き継げるように私たちがなんとしても大切に守って行きたいものです。

なお、次頁以下に越木岩神社の奥座の磐座（写真）と

図表Ⅰ 阪神間の磐座の位置

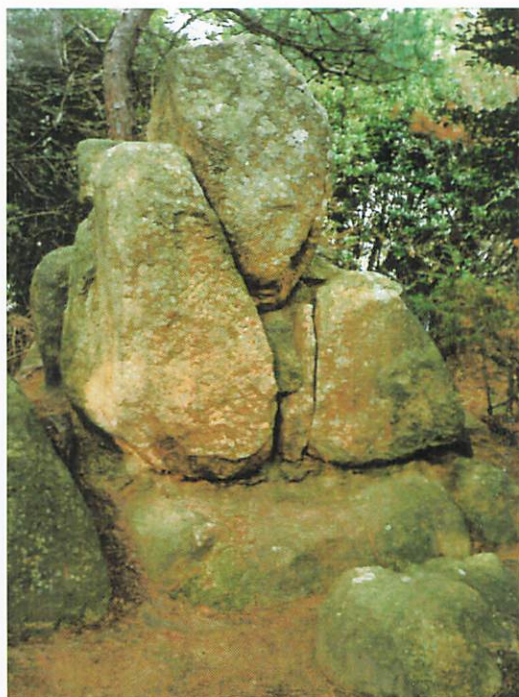
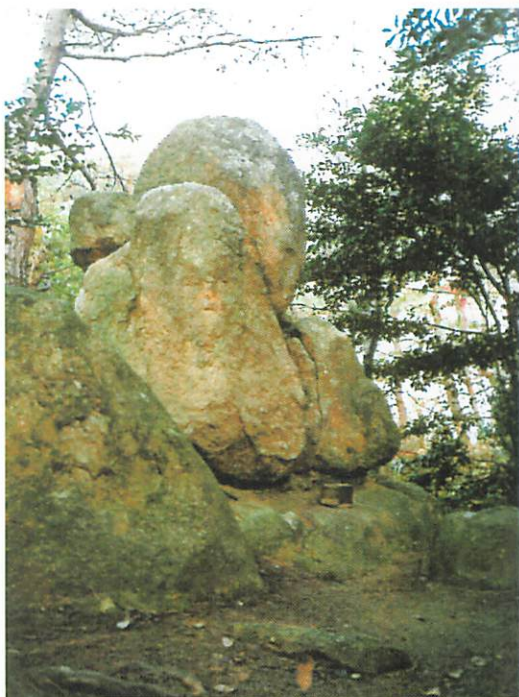
図表Ⅱ 六甲山―甲山系の磐座の配置図

図表Ⅲ 六甲山―甲山系の磐座の現状を掲載します。

越木岩神社の奥座の磐座 (阪神・淡路大震災前後の様相)

(1) 震災前

磐座の前面 (南面)



(2) 震災後



(修復後、前面)

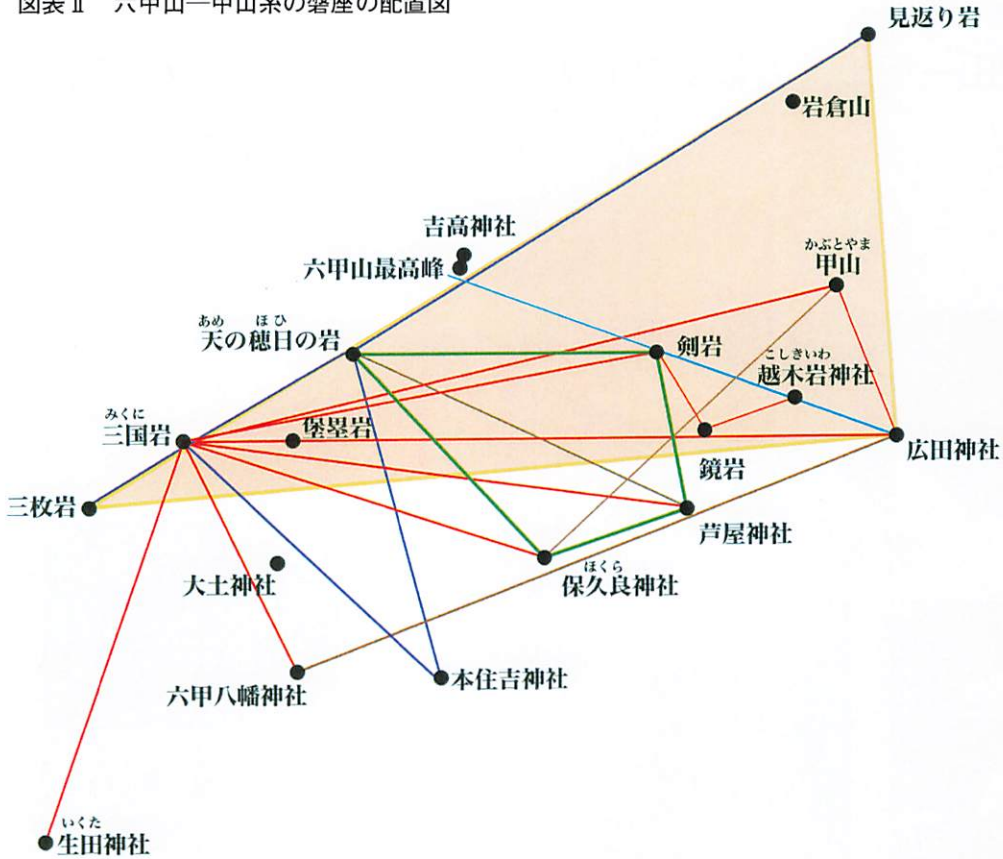


(修復後、西面)

図表 I 阪神間の磐座の位置



図表Ⅱ 六甲山—甲山系の磐座の配置図



1) 直角三角形型

- ①大三角形（三国岩の磐座祭場全体の規模を示す）
〔三枚岩 — 広田神社 — 見返り岩〕
- ②〔三国岩 — 六甲八幡神社 — 広田神社〕…同祭神
- ③〔保久良神社 — 三国岩 — 生田神社〕
- ④〔天の穂日の岩 — 保久良神社 — 甲山〕
- ⑤〔三国岩 — 劍岩 — 芦屋神社〕

2) 90% 直角三角形型

- ①〔劍岩 — 芦屋神社 — 広田神社〕
- ②〔三枚岩 — 甲山 — 広田神社〕

3) 二等辺三角形型

- ①〔劍岩 — 鏡岩 — 越木岩神社〕
- ②〔天の穂日の岩 — 本住吉神社 — 三国岩〕

4) 延長線上

- ①〔三枚岩 ^{西へ} 三国岩 — 天の穂日の岩 ^{東へ} 見返り岩〕
- ②〔広田神社 — 越木岩神社 — 劍岩 — ^{北へ} 六甲山最高峰〕

5) 矛(ホコ)型

- 〔天の穂日の岩 — 劍岩 — 芦屋神社 — 保久良神社 — 天の穂日の岩〕

図表Ⅲ

ろくこうざん

かぶとやま

六甲山一甲山系の磐座の形状



磐座



岩門



みくに
三国岩



あめ ほひ
● 天の穂日の岩



● 天狗岩

● 三枚岩

● 堡壘岩

神戸市

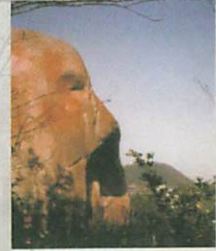
芦屋市





● 見返り岩

● 岩倉山



かぶとやま
● 甲山



● 剣岩



● 鏡岩

こしきいわ
● 越木岩神社



磐座



ほくら
● 保久良神社



岩門

西宮市

武庫川

編集後記

編集責任者 会員 中田 裕之

本号「日本文化の源泉としての磐座・磐境」は、古代遺跡研究所の発行するイワクラ雑誌としては第三号となります。

これまでの当研究所の書籍発行を振り返りますと

1999年に NPO 法人古代遺跡研究所の設立

2000年に 第一号「古代遺跡 いわくら（磐座）」発行

2010年に、第二号「イワクラサミット」発行

2020年に、今回の 第三号「日本文化の源泉としての

磐座・磐境」となります。

この間、2015年古代遺跡研究所所長 中島和子氏が逝去されたことは痛恨の極みでありました。

氏は、脳溢血によって左半身が不自由な身でありましたが、磐座についての探求心はまさに他の追隨を許さない、バタリティーあふれるものでした。

また、論文執筆への情熱も 燃えるような気迫がありました。

氏が 執筆された磐座論文は多数ありますが、その中に兵庫神社庁の発行する季刊誌「兵庫神祇」へ寄稿された論文が 8編あります。

この連載は 氏の突然の御不幸により 8編で途切れたため、未完となっております。

ただ、未完とはいえ、「兵庫神祇」という本は、神社関係者を対象とした冊子ですので、購読者も限られていますので、本来であれば、氏も多くの方々に読んでいただくことを希望していたことであろうと推測されます。

そのため、兵庫神社庁様のご了解のもとで、この「兵庫神祇」連載の8編を一冊にまとめて上梓したものが、この古代遺跡研究所発行の磐座第三号ということになります。

中島和子氏の略歴にもある通り、先生の専攻はアメリカ政治論でした。

20代の若年期には、単身でアメリカにわたり、アメリカ南部の黒人問題を現地調査した行動派の研究者でありました。そして日本の大学で「米国内政の中の黒人問題」を教壇で論じていた政治学者でした。

その先生が還暦を過ぎてから 研究テーマを「アメリカ政治の中の黒人問題」から「古代における政治と祀り」へと変更された理由は論文の中で述べられています。

しかし先生の研究テーマの中心軸には、常に世界平和と人類愛がありました。

民主主義国家 アメリカの中で 差別する側の白人と 差別される側の黒人文明の中で競争原理が支配する社会が生まれ出す勝者と敗者。

功利的な資本主義の中で増殖する個人の欲望と、その反対に 失われる自然への感謝の念。

これらのいびつな社会構造の背景には、人類の進歩といわれる物質文明があると氏は喝破されています。

私たちは物質文明の恩恵を受けています。

車の恩恵で歩くことも少なくなりました。ネットやスマートフォンで、情報を受け取り安楽な生活を享受しています。

生活が便利になり、豊かになればなるほど、その背景には、生産力の発達、科学の進歩があります。

人類の進歩とは 物質優先の文明なのです。

しかし、資本主義体制はこの傾向に拍車をかけてとどまることを知りません。

自由競争を基本原理とする現代社会では、企業間の競争が熾烈です。

大人たちは 隣人や同僚との横の競争に常に意識が向きがちです。

また子供たちも夜遅くまでの塾通いで、企業戦士の子備軍として成長しているようにも見えます。

イジメや差別も、また過労死という無残な死も、この競争の中から派生しているように思えてなりません。

これらの「弱肉強食」の社会構造の根本的な原因は、巨視的な視点で眺めれば 農耕からはじまる物質文明にその原因が帰着します。

こうして開発と科学の名において自然を破壊していくことを繰り返すうちに人間は何をしても許されると思ってしまったのではないのでしょうか。

大きな自然に生かされている人間という立場を忘れ、利己的に生きるという欲望が、ますます強まっているように思われます。

しかしその物質文化に対して 古代は 精神を優先する文化でした。

精神文化とは 欲望を充足させる 「物」ではなく 目に見えない 精神を優先する文化です。

物質文化にどっぷりそまった現代人からみれば、目に見えないものは 存在しないとみられます。その存在を立証できないものを 尊んだり拝んだりすることは、非科学的で、研究の対象にならない、と見られるのです。

しかし、万物に神宿るといふ 自然（太陽）崇拜の精神は
国境のない 有史以前の古代社会では 民族を問わず、共通
の信仰であり精神でありました。

我が国の磐座という巨石を、なぜ、山上に運び上げたので
しょうか。

エジプトのピラミッドや、ナスカの地上絵なども、なぜ、
大変な労力をかけて造りあげたのでしょうか。

古代の自然（太陽）崇拜の精神は、宗教というよりも、ア
ニミズム信仰を内包した生活様式とか生活習俗Way of Lifeに
近いものでありました。

ただ、今更 自然を修復することは もはや現代において
は不可能なことです。

しかし、古代に思いを馳せて 森や海や山や川などの自然
を崇拜する心を 取り戻すことは 可能ではないでしょう
か。

幸い 日本には、自然の恵みに感謝して神を称えるその数
十万の神社が残っているのです。

その神社建築（木造）の前身は そこに神が宿るとされた
磐座でありました。

つまり、アニミズム信仰のシンボルとしての意義が、磐座
にはあるのです。

わたしたち、古代遺跡研究所の仕事は、この磐座の精神を
学ぶこと、そしてその調査研究と保護を目的として活動をし
ております。

この本を手にとっていただいた皆様の御縁に感謝します。
そして 磐座への共感とご理解・ご賢察を賜りますよう
お願い申し上げます。

《もう一言》

東京支局 会員 高橋 滋生

二〇一五年十月一日発行の 磐座（いわくら）ニュース第五号は、中島和子追悼特集だった。巻頭言は中島和子所長の遺した文であってそれはこんな記述から始まっている。

「(抜粋) 私は今、生を終わる前に二つの仕事を成し遂げたいと思っている。一つは六甲山頂でイワクラサミットを成功させること、他はイワクラ〈磐座〉についての著書を出版させることである。」とある。

ご承知のように「イワクラサミット in 神戸」は、二〇〇八年、成功裏に終わり、その経緯は、われわれ研究所の学術雑誌「いわくら〈磐座第二号・二〇一〇年十一月発行〉」に記録されている。それは中島所長の実に行き届いた論考で六甲山に地軸を置きながらも、他県や国際的視野をもって調査報告して、左半身不自由な身で作った優れた冊子である。技術的には、若いコンピューター印刷技師大月竜氏が密着して中島氏を補佐した。

今回刊行した第三号はこの「イワクラサミット」報告に続く冊子で、その論文は兵庫県神社関係者対象の冊子「兵庫

神祇」に依頼され八回にわたって中島所長が書いたものである。神社関係者だけの読者から、いわくら研究者、一般の人たちに正確にいわくらの存在意義を伝えられたら中島和子氏の遺志を必ずや継ぐものと思った。

本作りの経験のある会員・中田裕之氏はこの「兵庫神祇」に掲載された論文をこのイワクラ第三号に仕上げてくれた。

これは中島氏への供養であるばかりでなく、研究所の新しい出発の起爆剤になるかもしれない。四年余り、新しい指導者を迎えずに、残された中島所長の論文や荒深道斎著「神の道」、日立道根彦著「宇宙時代の古事記正解」などのような方法で学ぶかが定着していなかったため、潤滑に例会が進んでいなかった。山積された資料は和田所長の厚意で会社の一隅を使わせてもらっているため、作業の日ももうけられている。貴重な磐座の資料を続けて(四)、(五)と出す力があるだろうか、と欲張って考えてしまふ。

中島所長に「あなた方は『四天王』+ a だから」とも、「中核だから」とも言われて、中島所長の最晩年を励まし合って支えた。

その中核とは、和田憲一、森本博、肥後絢子、藤本チヨ、高橋滋生、中田裕之、家事・食事で支えてくれた阪下登美子さん、森信子さん、おしゃれ指南の三井知妃さん。

「頑張ろうね」いつもそう言って別れたものだった。

中島和子氏の人徳ゆえに多くの人が往来していた。そして今もペーパー資料を何とかまとめたいと目を皿のようにして判読している会員たち。

二〇一五年五月二五日の総会も中島氏は出席の予定だったが、最後までNPO法人古代遺跡研究所の発展を望んでいた。新しい型での研究所が和田憲一所長のもとに始まるのである。新しい萌芽である。会が整ったら会則を読み直し、会費を設定し、例会に出席しては、賢くなって身も心も豊かになって帰路に就く会でありたい。

— 略 歴 —

なかじま よりこ
中島 和子



- 1956年 同志社大学法学部政治学科卒
1958年 同志社大学政治研究科政治学専攻修士課程修了
1958～61年 米国ミシガン大学大学院政治学部に留学
研究テーマ「黒人解放運動はどこまでアメリカ政治を変えるか」
1964～67年 東京大学社会科学研究所助手
1967～90年 桜美林大学教授、
その間、
1974～76年 米国アトランタ市エモリ大学客員研究員
1980年～90年 中央大学法学部兼任講師 「アメリカ政治論」担当
1990～2000年 京都精華大学教授 政治学担当
1996年 中央大学法学部より法学博士（政治学）授与される。
1999年 研究テーマを「古代における政治と祀り」に変更
同年：特殊非営利活動法人・古代遺跡研究所が認可され、所長に就任
2015年5月25日 逝去

主要著書：「黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発」中央大学出版部
「アメリカ黒人解放運動—新しいニグロ群像」未来社
「キリストの証人たち—抵抗に生きる 3」日本基督教団出版局
共訳「古代ハワイ人の世界観 人と神々と自然が共生する世界」たちばな出版
他 イワクラ論文 多数

磐座 第三号

「日本文化の源泉としての磐座・磐境」

2020年1月発行

発行 NPO法人 古代遺跡研究所
所長：和田 憲一
住所：大阪市西区北堀江3-6-28

編集責任者 中田 裕之
住所：兵庫県西宮市松園町15-22
電話：0798-34-6148
Mail address：naininomiya2298@yahoo.co.jp





定価:1,000円(税込み)